

2011 年度

アジアダイナミズム班研究論文

孫文、伊藤博文、安重根

— 日中韓の三人の歴史的人物から学んだこと —

経営情報学部

4 年 西村 遼

4 年 野崎 学

2 年 加藤駿介

2 年 吉田敏子

グローバルスタディーズ学部

4 年 宮崎 真

3 年 星野 一

はじめに

本研究を始めた2011年は、世界中を震撼させ、未来への先行きの不安と期待、そして新たな活力を感じさせた年である。日本では3月11日に東日本大震災が起き、多くの尊い命が亡くなった年である。同時に、2011年というのは、中国と台湾にとっては辛亥革命から100年目の年である。そして、その前年のチュニジアでの所謂「ジャスミン革命」に端を發し、エジプトや、バーレーン、イエメン、リビアなど多くのアラブ諸国で民主化運動が起きた年である。また、前年の2010年は安重根が伊藤博文を暗殺し、死刑になってから100年目の年であった。それゆえ、辛亥革命に大きな役割を果たした孫文や、伊藤博文、安重根から研究できたことは大変意義深いことだと感じている。

アジアグループは、1期目において日本のこれからの留学生獲得戦略について研究し、2期目は二つのグループに分かれ、一方は東アジアにおけるヒト、モノ、カネの流れについて研究し、またもう一つのグループは、アジアの歴史・文化への理解を深めた。本研究は、中国、朝鮮半島、日本における歴史的人物を通して何が学べるかという問いから始まった。

100年前の孫文ら中国の志士や民衆による革命運動を振り返ると、エジプトやリビアにおける民衆の革命運動と重なるところがあった。もちろん、アラブ諸国での一連の民主化運動は「アラブの春」と呼ばれているように、その言葉には、民主主義国からの未来への先行きの不安ではなく、むしろアラブへの強い期待と歓迎が込められているように思える。他方、辛亥革命を担った中国の人々は国内の革命だけでなく、帝国主義というイデオロギーに依拠した西欧列強諸国や日本と激しく立ち向かわなければならなかったという点で、民主化運動を行ったアラブ諸国、特にエジプトやリビアとは大きく異なる。エジプトやリビアが独裁制を打破し、民主制になるのか、あるいはイスラム教に基づく政治体制になるのか分からないがゆえに、エジプトやリビアは国際連合やアメリカによって民主化を後押しされている。北大西洋条約機構も、リビアにおいてカダフィ政権によって不当に抑圧されている人々を救うという名目で軍事介入し、カダフィ政権崩壊に大きな役割を果たしたが、今後も介入していくであろう。しかしながら、それぞれ民衆の蜂起という点、不安定な状態、そして国際的な援助が必要な点は共通しており、かつての中国と同じように各国の利害がエジプトやリビアにおいても絡まっている。いかにエジプトやリビアが急激な変化に伴う様々なそうした問題を克服するかも、中国での革命や朝鮮半島での独立運動など歴史から今こそあらためて学ぶ時なのではないか。

本研究は、まさに歴史を振り返り、世界の平和と発展、そして全人類の尊厳に思いを致す機会になった。本研究を通して、我々は未熟ながらも歴史と向き合い、その深さと戦い、歴史から学ぶ第一歩とした。

平成24年1月14日
アジアダイナミズム班一同

謝辞

本研究は、冒頭で挙げた 6 人で互いに刺激し合い協力して研究活動を行い、本論文を完成させることができた。しかしながら、本論文は決して 6 人の力だけで完成できたのではなく様々な方々の協力や、助言、そして先行研究などがあったからである。

まず、感謝の意として紹介したいのが、多摩大学学長の寺島実郎先生である。寺島先生は本研究に当たり、研究テーマの源泉を与えてくださり、時に貴重な助言を提供して下さった。そして、何よりインターゼミに関わる全ての人との出会いの場、学びの場を提供して下さった。さらに、私たちは寺島先生の様々なテーマに関する話から多くのことを学ぶことができた。

次に、多摩大学経営情報学部教授の金美德先生である。金美德先生は、アジアグループの担当教授として研究しやすい環境や、私たち個人に合った助言、叱咤激励、ときに笑いをもたらしてくれた。そして、同学部特任教授の菅野光公先生は、同じく担当教授として私たちを温かく見守って下さった。菅野先生は、優しくときに鋭い助言を与えて下さった。また、多摩大学グローバルスタディーズ学部非常勤講師の藤田賀久先生は担当教授ではないけれども、第 1 章において大学の授業の終わりに、問答形式で貴重なアドバイスを提供して下さった。本研究グループ一同は、この研究に様々なコメントや刺激を与えて下さった全ての教員の皆様や、他の研究グループの学生を含め全ての方々に心から感謝する。そして、様々な知見を与えてくれた先人にも感謝したい。彼らの知見や思いなしに、私たちはこの論文を書くことはできなかった。

最後に、この一年間、多摩大学学長室高野智さんや山本さん、多摩大学の図書館の職員の方々には様々な形で協力していただき、私たちの身勝手なところにも親切に対応して下さったことを心から感謝したい。そして、この研究活動や学生生活において家族が私たちを日々支えてくれたことにもあらためて感謝している。私たちは、これだけの方々から支えていただけたことは忘れてはならない御恩だと感じている。

アジアダイナミズム班一同

目次

はじめに.....	1
謝辞.....	2
目次.....	3
第1章 歴史の教訓の深さ.....	5
—孫文と日本との関係史を通して—.....	5
はじめに.....	5
第1節 歴史の教訓.....	6
第2節 孫文の政体構想と日本の政治体制との違い.....	7
第3節 日清戦争から孫文が亡くなるまでの孫文と日本との関係.....	9
日清戦争以前の孫文と日本.....	10
初めての蜂起.....	10
孫文亡命と日本との関係.....	11
孫文と宮崎滔天との出会いから得られた教訓.....	11
孫文の革命の軌跡と日本との関係.....	15
辛亥革命達成と日本政府の反応.....	16
第二革命以後、孫文と日本との関係.....	18
第4節 孫文と日本との関係からの教訓.....	19
結びに.....	21
第2章 孫文の人物像とその思想.....	22
はじめに.....	22
第1節 孫文という人物.....	23
孫文の生まれと名前の由来.....	23
孫文の家庭環境と学歴.....	23
孫文の女性関係.....	24
第2節 孫文と宋家三姉妹.....	24
孫文と慶齡の出会い.....	25
孫文と慶齡の関係.....	25
第3節 宋家三姉妹が選んだそれぞれの道.....	26
第4節 孫文の思想.....	27
大アジア主義.....	27
三民主義.....	28

孫文が大事にしていたもの	29
中国の改革開放路線の先取り	30
第 5 節 孫文とはどんな人物なのか.....	31
結び.....	31
第 3 章 伊藤博文の対アジア戦略	33
第 1 節 日清戦争	34
日本と清国のそれぞれの立場.....	34
第 2 節 日露戦争	35
開戦まで揺れ動く軍部.....	35
日本としての立場、ロシアとしての立場.....	36
日露戦争開戦	37
第 3 節 日韓併合	38
日韓議定書発効.....	38
日韓議定書その意義	39
第 4 節 大アジア主義～広い視点でアジアを見る～	40
考察.....	41
第 4 章 安重根の評価	42
はじめに	42
第 1 節 安重根のアジアへの思い	42
安重根を尊敬する日本人の存在	42
第 2 節 金玉均と安重根との関係性.....	43
第 3 節 生い立ちから少年時代.....	43
第 4 節 義挙への道のり	44
第 5 節 義挙（正義の為に事を起すこと）	45
第 6 節 公判と処刑.....	46
第 7 節 遺墨.....	49
結び.....	50
結び.....	54
参考文献一覧.....	55

第1章

歴史の教訓の深さ

—孫文と日本との関係史を通して—

グローバルスタディーズ学部4年 宮崎 真

はじめに

本章の研究目的は、孫文と日本との関係史から様々な教訓を紐解くことである。教訓を紐解く上で、孫文と日本との関係史を選んだのは、前年に樽井藤吉のアジア主義について考え、中国の指導者としてアジアの連帯を呼びかけた孫文という人物に惹かれたからである。しかし、はじめに、宮崎滔天の『三十三年の夢』を読み、宮崎滔天の希望と苦衷を理解するようになった。孫文と日本との関係を理解するにも日本の近代史と同時代の中国、世界情勢をより深く学ばなければならないことも自覚し、時間と力の限りを尽くしその理解を深めた。

本研究目的に至るまでに、孫文と日本との関係を追っていく中で、度々迷うこともあった。しかし、その関係史から何が学べるかと問い続けていくうちに、その関係史から段々と現在や未来に連なる教訓が幾つか見えてきた。そして、その複雑な深みを感じることができた。本章を「歴史の教訓の深さ—孫文と日本との関係を通して—」という題にした所以もそこにある。

この論文の視点は、歴史的視点が主であるが、大学の選択した科目において学んできた主権や民主主義、日本の近代史、儒教、西欧思想が影響している。また、教訓と歴史との関係を考察する上で、反実仮想を用いた。「反実仮想とは、事実に反する条件命題であるが、原因を確定する思考上の実験である（ジョセフ・ナイ、p. 90）。」反実仮想は真の歴史ではないと考える人もいるが、ハーバード大学の高名な国際政治学者であるジョセフ・ナイ氏は、ある種の取るに足りない反実仮想の分析と因果関係を明瞭にするような優れた反実仮想の分析とをはっきり区別すべきであると主張している。（ジョセフ・ナイ、p. 94）ジョセフ・ナイ氏が区別する理由には、反実仮想には、何が何より重要だったかを見分けるための原因整理をする上で有益な方法になりうると考えるからだ。（ジョセフ・ナイ、p. 90）本論文においても、その整理は極めて重要だった。原因の整理が教訓を紐解く上で手助けとなった。

したがって、本論文は反実仮想を用いたことから分かれるとおりに、歴史史実にのみに基づいて考察した論文ではないことを断っておきたい。この研究を通して、孫文と日本との関係史から紆余曲折しながらも得られた、あるいは確認できた教訓というのは、「民主主義のあり方」や、「多様な人間関係の構築」、「時代や状況に対する認識を深めること」、「海外

から日本へ来る動機の構築の必要性」、「共通善に関する対話」、「友人関係について」と非常に様々である。本章は、こうした孫文と日本との関係史や教訓を明らかにするために、4節に分けて構成した。

本章の第1節では、「歴史の教訓」について説明する。第2節では、1890年代初期の日本と清の政治面での比較と孫文が政治活動に至る背景を振り返りつつ、「孫文の初期の政体構想と日本の政治体制との違い」について述べる。第3節では、「日清戦争から孫文が亡くなるまでの孫文と日本との関係」を明らかにし、第4節では、「孫文と日本との関係からの教訓」について述べる。

第1節 歴史の教訓

日本に限らず、世界中の人々が当たり前のように受け止めている価値観や状況、問いが歴史からの教訓に由来していることがある。本章の主題は孫文と日本との関係を通しての歴史の教訓であるけれども、本節では少し歴史の教訓自体について考えを巡らしたい。

歴史の教訓とは、後世が未来や現在をより良くするために、必ずしも真実とは限らない歴史から学び取れることである。それは、二度と繰り返さないように訴えかけるようなことであったり、様々な物事の成り行きに対して強い説得力を与えたりするときがある。それは、口伝えや教育などによって世代を超え、時に国を越えるものであり、人々の考え方や行動、憲法を含む法制度、国家の理念に影響を与えてきた。例えば、日本では、日中戦争や太平洋戦争、広島長崎への原爆を通して、二度と戦争を起こしてはならないという考えや、「非核三原則」と呼ばれる核兵器を持たず、作らず、持ち込ませずという考えといった歴史の教訓が、多くの人々によって共有されている。つまり、歴史の教訓は、政治や人々の信条に今でも大きな影響を与えるものであり、判断材料や規範とされている。しかしながら、それは、時代によって異なることがある。その時代には適した教訓であっても別の時代には適さないことがある。また、歴史の教訓は、時代だけでなく個人によって、社会によって、あるいは国など組織によっても異なることもある。こうした差異が、人々に判断の根拠だけでなく論争あるいは「問い」をもたらしている。

この観点から、歴史の教訓は互いに調和し合い、あるいは対立し合い、日本だけでなくアジア、世界のダイナミズムを作り出している最も大きな要素の一つであると言っても過言ではない。欧米諸国では、第一次世界大戦を通して、平和やヒューマニズムによる軍事的解決への否定的な観測や、帝国主義的な侵略を防ぐための集団安全保障の考えが芽生え、一方で第二次世界大戦を通して集団安全保障の発展だけでなく軍事的解決の重要性が再帰した。この後者は、核兵器や国際連合をもたらし、核の抑止力を承認するが、広島長崎の教訓を糧に核兵器の存在を否定する考えや戦争そのものを否定する考えとは相容れないものである。どちらの考えが正しいかを問い続けるテーマの一つであり、歴史の教訓が後世への問いを創出していることがわかる。

人類は歴史に先んじて学ぼうとすることもあるし、歴史に先んじて、あるいは歴史を知らずして実行することもある。というのは、人間には、どのような結果、未来が待っているかを完璧には予測できないし、必ずしも歴史に囚われてはならないことがあるからだ。それに、歴史から得られた教訓も、ある目的を果たすためには十分ではないことも、目的が変化することで適合しなくなることがある。国際政治においては、大きな戦争の終結後、その歴史から学んでウエストファリア・システムやヴェルサイユ・システムが構築されたが、いずれも修正が迫られた。その修正は、大きな戦争以前に構想されていた考えに近いものであったりする。しかしながら、歴史から学んでいけば、回避できるようなことや、より良い判断を下すことができたことも事実であろう。例えば、冷戦が米ソの核戦争にならなかったのは、広島、長崎のあまりにも悲惨な歴史があったことが大きな一因ではないだろうか。また、どんな歴史から学ぶかによって得られる歴史の教訓は異なる。本研究においては、孫文と日本との関係史も深めれば深めるほどに、より多くの教訓を得ることができた。そこから得られた教訓も、後世への戒めだけではなく、後世への問いかけでもあった。

第2節 孫文の政体構想と日本の政治体制との違い

第2節では、孫文の革命への志を抱くまでの流れから、日清戦争までの日本と中国の情勢、そしてその時代の孫文の政体構想と日本の政治体制の違いを振り替える。その目的は、その後の孫文と日本、中国と日本との関係の背景を明らかにするためである。

孫文(1866年－1925年)が幼かったころには、すでに中国はイギリスとのアヘン戦争(1840年－1842年)や第二次アヘン戦争とも呼ばれるアロー戦争(1856－1860)以来、西欧列強諸国によって圧迫されていた。孫文は医学を学んでいた頃から、国家存立の危機の原因を清朝による時代に合わない政治体制と見立て、清朝の打倒を考え始めた(保阪正康、p. 26)。孫文は、西欧列強の圧迫から中国の民衆を守ろうとしない君主(天子)を頂点とする政治体制から中国の民衆が治める政治体制、すなわち共和制へと中国を変えるという強い志を抱くようになった。さらに、日本や他の東アジアとの関わりを通してアジアが連帯し、西欧列強に対抗するという志を抱くようになった。しかしながら、孫文はそれらの志の実現のために様々な障壁に立ち向かわなければならなかった。

その障壁の一つが、現代の中国でも抱えている問題だが、人々の間には国内が一つに統合されるために必要な中国人としての国民意識が欠如していたことである。その頃の中国とは、清という王朝の下に、明治維新の黎明期のように様々な権力者(軍閥)がそれぞれに中国を封建的に支配し、民族は漢・満州・蒙古・チベット(西藏)・ウイグルなど主に5つに分れ、今以上に中国国民という意識はなかった。私が大学で受講した「主権」という授業で中国と儒教の関係について話が及んだとき、その担当の先生が儒教は中国の人々をまとめるイデオロギーになっていたと評価していたが、国民という意識はまた別の要素が必要だった。むしろ儒教によって家族の結びつきが、同じ国民であるという考えよりもは

るかに強く、儒教における人生や社会とのあり方が国全体の秩序を支え、人々に伝統を守るよう非常に強く働きかけていた。特に、清朝における伝統的な教育制度はそれ以前の王朝から引き継いで深めてきたものであり、その中身は儒教に元づいた伝統的な社会を守るものであった。儒教的な社会観念が近代化への大きな障害となっていた。その影響の大きさは孫文ではなく毛沢東が中国全体の権力を握るまで続いた。まして、清朝治下では、当時の中国には近代的な教育が普及せず、国民軍も確立されず、西欧列強に対抗できる力を備えていくことは極めて困難だった。その近代化と統合の未発達が、時として西欧や日本の帝国主義勢力によって付け込まれる原因としてしばらく続くことになった。

一方で、日本は西欧から学びながら、封建制度を改めて近代化を漸進的に推し進めていた。また、伊藤博文や山縣有朋、大隈重信など明治維新を先導した旧藩閥の主要な人物もヨーロッパで法制度や軍制度など様々なことを学び、漸次導入した。明治政府は、西欧諸国から学んだ政治制度や教育制度を通して近代化の要諦として日本にいる民衆の間にナショナリズムを育み、日本国民であるという観念を形成することに成功した。その一方で、薩長出身のリーダーは漸進的な立場をとったが、より急進的な立場をとるリーダーや知識人も、あるいは封建制度に慣れ親しむ旧士族もいたため、明治維新以来内戦や政治的対立も頻発した。旧士族などによる反乱の鎮圧は、明治政府にとって、近代的な軍事システムの試金石にもなった。

明治維新以来創設された官公庁や学校は、西欧の学問や技術を学ぶためにドイツ、イギリス、アメリカなど西欧諸国から優秀な外国人、いわゆる御雇外国人を雇い入れ、日本が近代化され不平等条約を撤廃できるよう国を挙げて努力した。それゆえ、日本は数多くの学問分野で野口英夫などの優れた科学者を輩出するようになっただけでなく、日本の近代化によって日本と近隣諸国との関係に大きな影響を与えた。その中でも、日清戦争での日本の勝利は中国との関係において大きな変化をもたらした。この日本の勝利は清朝政府内の高官だった康有為や梁啓超ら清朝における近代化を推し進めようとしていたグループ（変法派）にあらためてその必要性を感じさせることになった。もちろん、彼らは西太后はじめとする儒教に基づく政治を守ろうとするグループ（守旧派）と対抗しなければならず、結局政局において敗れてしまった。しかしながら、中国の本格的な近代化への布石となったことは疑いようがないだろう。

孫文は、清朝の下に、近代化しようとした変法派と呼ばれるグループはあったが、変法派には中国の近代化を阻む古い政治体制や既得権益勢力を打ち破るだけの力もなく、自分が構想していた共和制とは根本的に異なる点から相容れなかった。変法派のリーダーであった康有為は中国の儒教文化を重んじるとはいえ、日本のような立憲君主制を構想していたために、君主の存在を否定するような孫文ら革命派を受け入れることができなかった。この共和制か立憲君主制かの違いは、立憲君主制である日本が孫文ら革命派と康有為ら変法派のどちらを支持したかという意味で、孫文と康有為との関係だけでなく日本との関係においても重要だった。

第3節 日清戦争から孫文が亡くなるまでの孫文と日本との関係

第3節では、日清戦争から孫文が亡くなる 1925 年までの孫文と日本との関係を振り返りたい。その目的は、第4節で両者の関係から得られた教訓を整理するためである。

孫文の一生を通じて成し遂げようとした志に深く関係したのが、日本だったことがよくわかる。孫文と日本との関係は、人的にも、地理的にも、時代的な面でも多様でもあったが、限定的でもあった。地理的な面では、孫文が生涯で 16 回日本に訪問し、東京、横浜、名古屋、大阪、神戸、福岡、長崎、熊本に訪れた。それらの地における政治家や知識人、自由民権運動家、経済人、地主など様々な日本人と関わり合った。一方で限定的だったというのは、孫文がその他の地域の人々や経済的に豊かではない人々との関わりは非常に少なく、そして日本の当時の全人口から見ても限られていたということである。日本政府の要人や政治家との関わりにおいては、日本政府は清朝との関係を考慮し、孫文と公式に会ったのはただ一度だった。清朝との関係だけでなく日本政府や軍部には孫文の民主的な考えに基づく革命の日本への影響を考慮していたものもいた。

したがって、孫文ら革命派を支えた日本人もいれば、支持しなかった日本人も、また知らなかった日本人もいた。また、日本政府の対応も孫文ら革命派に対して否定か中立、秘密裏な関係のどちらかであった。革命派を支えたものの中にも様々な思惑を持つ者もいた。それゆえ、当時、孫文のアジアの連帯への願いは広く日本に伝わっていなかったといえる。しかし、その多様さの中には、孫文の志を懸命に支えた少数の日本人がいたことは忘れてはならない。

孫文と日本との関係に時代の変化や出来事も大いに影響を与えた。例えば、日清戦争（1894 年）、義和団事件（1899 年）、日露戦争（1904 年－1905 年）、第一次ロシア革命（日露戦争中の 1905 年）、第一次世界大戦（1914 年－1918 年）、第二次ロシア革命（第一次世界大戦末期の 1917 年）、日本での普選運動（1900 年－1925 年）、五四運動といった歴史的出来事あるいは過程である。これらの出来事は、辛亥革命（1911 年）や、孫文らによる第二革命（1913 年）など孫文の政治活動と深くかかわっており、孫文と日本との関係を追っていく上でも非常に重要な時代区分である。

しかし、大きく二つに分けるとしたら、辛亥革命が境であろう。つまり、孫文ら革命派が 1911 年に南京で中華民国臨時政府を樹立し、辛亥革命を達成するまでの間と（保坂正康、p. 89）、その後、相対する北京の清朝政府との妥協後から孫文が亡くなるまでの間とを分け、孫文はそれぞれの時代区分でどんな局面を向かえ、日本との関係がどう変化したのかを明らかにしたい。

こうした分析から、何故、孫文が「日本人」から尊敬されてきた一方で、彼が心から望んだ日本を含むアジアの連帯が過去になされなかったのかが理解でき、その関係史からこれからの日本と中国、世界とのあり方において問いかけてくる教訓が見えてくる。

日清戦争以前の孫文と日本

孫文は日本と関わる以前から、日本を清国よりも先に近代化を達成した国として認識していた。軍事の面で、清朝には明治政府が西欧列強に習って創設した徴兵制による近代的な軍隊というものは存在しなかった。そのような状況だったがゆえに、孫文が27歳のときに、北洋大臣李鴻章に提出した救国の大計をまとめた意見書にも、「日本の明治維新」を例に、西洋の長所を見習う重要性を訴えたのである。(保阪正康、p. 26)しかし、孫文の意見は受け入れられなかった。それゆえ、孫文は1894年に始まる日清戦争で清が日本に負けることを予見していた。しかし、開戦時の日本陸軍は動員兵力12万人、海軍は軍艦28隻、そして魚雷を備えた小型の水雷艇4隻だったが、一方、清国の歩兵、騎兵は30万人、開戦後には新しく編成された部隊を合わせて60万人(実際に戦場で戦ったのは日本軍より少なかった)いたと井上清氏は述べている(井上清、p. 35)。それだけ軍の規模に差があったにも関わらず、日本が日清戦争を勝利できたのは、井上氏の指摘によると、日本軍の士気と軍備が清軍よりも勝っていたからだ。(同、p. 35)ただし、下関条約で得られた中国での日本の権益などを守るために、日本政府は清王朝を国家として承認し、戦争後も国交を維持した。日本政府にとって、西欧列強諸国と同様に不平等な関係を維持することが日本の国益にとって都合がよかった。

したがって、日本政府も西欧列強諸国のような態度をもって、あるいは他国と競争して中国での権益を拡大しようとしていた。孫文ら革命派にとって、日本政府と清朝政府との国交関係の継続が日本との関係形成において大きな壁の一つとなった。

初めての蜂起

孫文は、前年の1894年にハワイで清朝打倒のために興中会を設立した。孫文は興中会設立の場所として中国ではなくハワイを選んだ。孫文の医院は中国の南部香港の隣に位置する広州にあり、そこで医療活動をしていた。それにも関わらず、活動拠点としなかったのは、清朝政府を警戒していたからであろう。

孫文の革命運動初期においては、清朝政府の力がたとえ衰えていたとしても、決して清朝政府を侮ることはできなかったし、清朝政府もそうした革命運動を警戒していた。事実、1895年10月25日に広州において孫文らがはじめて計画した武装蜂起も事前に清政府に洩れ、鎮圧されてしまった。(保阪正康、p. 28)孫文は清朝政府に首謀者として1千円の懸賞金をかけられ、日本の横浜に亡命することになった。(同、p. 28)

また、清朝政府は日清戦争での敗戦後、官費で13人の若者を日本に留学させるようになった。『辛亥革命と日本』という本の中で、孫文研究で名高い神戸大学名誉教授の安井三吉氏は、日清戦争以後、前近代とは逆に中国人が日本から学ぶようになったことについて触れ、「日清戦争が日本の中国侵略と日本人の中国蔑視の重要な契機となったが、中国人の日

本観にとっても大きな契機になった。」と述べている。

孫文亡命と日本との関係

孫文が1895年に始めて日本に亡命してから、孫文と日本との関係は広がり始めた。孫文ら革命派にとって、母国で活動するのが困難な状況である以上、日本や海外で革命を実現するための力を蓄える必要があった。そのために、孫文は諸外国に点在する経済力のある華僑や、諸外国の人々を味方につける必要があった。もちろん、孫文らは亡命者であるがゆえに日本に来ていたとき、日本政府や清朝政府に身の安全を保障されて日本にいられたわけではない。事実、孫文は日本以外の海外の国々においても、自らの命を清朝政府によって狙われていたことはロンドンでの幽閉事件からも推測できよう。また、最初から多くの華僑が孫文ら革命派を支持したわけではなかった。

孫文は日本亡命以降、同志の陳少伯を通じて、菅原伝から海軍出身の曾根俊虎、曾根を通じて宮崎滔天の兄である宮崎弥蔵と知り合うなど日本との関係を広げることができた（保坂正康、p. 30）。香港で知り合った実業家の梅屋庄吉にいたっては、孫文に資金援助をしたほどである（同、p. 31）。何故彼らは、孫文を支えようと思ったのか。菅原という人物は、東京帝国大学法学部卒業後、アメリカで自由民権思想を学び、日本でその思想を実現することを考えていたがゆえに、孫文の民衆の自由と権利に由来する共和制という構想に共鳴できたからであろう。その他の日本人にしても、日本の限られた集団に権力が集中している藩閥政治と呼ばれる寡頭政治を脱却しようとした自由民権運動家であった。つまり、彼らは孫文の人柄に惹かれたのかもしれないが、彼の政治観に共鳴したのである。1893年に亡くなったが、代表的な自由民権思想家であり、私擬憲法において抵抗権を認めた植木枝盛が生きていたなら、きっと誰よりも孫文の革命を支持したであろう。日清戦争のころには、日本での自由民権運動は板垣退助など有力な人物が政府に懐柔され、大日本帝国憲法が制定され、国会が開設されるなどして下火になっていた。孫文を支えた日本人は自由民権思想の実現という志を中国に求めるようになっていたのである。事実、支那での革命をもって日本を民主化することを考えていた人物もいた。こうした孫文と日本との関係から、西欧から移入した自由民権思想がナショナリズムと並んで東洋の教育水準に達した人々の間に影響を与えていたことがわかる。

孫文と宮崎滔天との出会いから得られた教訓

孫文の政治観に共鳴した日本人を語る上で、宮崎兄弟は欠かすことができない存在である。宮崎兄弟の中でも、上から西南戦争で死した宮崎八郎、孫文の「平均地権」という考えに大きな影響を与えた宮崎民蔵、孫文と兄弟の中で最も早く交流した宮崎弥蔵、そして宮崎寅蔵（滔天）が名高いのだが、この兄弟に共通して言えることは、やはり自由民権家であったということだ。その兄弟の中でも宮崎滔天（1871年－1922年）は孫文を最も支え

たといえる。宮崎滔天は『三十三年の夢』の中で、弥蔵死後 1897 年、孫文を支えるきっかけになった孫文との対話を紹介している。一部現代語訳にして紹介したい。

滔天は孫文に支那革命とは何か、その主旨と、その方法について尋ねた。孫文は、滔天にこう答えている。

「余は人民自ら己を治むるをもって政治の極則なるを信ず、故に政治の精神においては共和主義を執る、しかり、余やこの一事をもってして直ちに革命の責任を有するものなり、いわんや清虜政府を執るここに三百年、人民を愚にするをもって治世の第一義となし、その膏血を絞るをもって官人の能事となす、すなわち積弊推委して今日の衰弱を致し、沃野好山、坐して人の取るに任するの悲境に陥る所以なり、心あるもの誰か袖手して傍観するに忍びんや、これ吾徒自ら力をはからず、変乱に乗じて立たんと欲して、しかして空しく蹉跌（失敗）せし所以なり（宮崎滔天、1998 年、p. 151）」、

この孫文の言葉から孫文が人民によって統治される共和制を描いていたことがわかる。つまり、孫文は一部の知的エリートや貴族だけでなく全ての中国人民が国の統治に関わるべきだということを百年以上も前に考えていたのである。また、清朝政府が三百年間、人民を愚かにして人民を治めていること、清朝の官人は人々が苦勞して蓄えたものを絞り取ることをなすべき事柄とし、國中を衰弱させていることを孫文は批判している。孫文は、心あるものならば、こうした清朝の政治や国情を袖に手を入れてただ見ているのは耐えられるはずがないと述べている。この一連の孫文の言葉には、民主主義、あるいは民主政とは何かというものを考えさせられる。今の日本は民主主義国家であり、清朝治下の経済情勢と比較すると、はるかに豊かであるけれども、多くの日本人は孫文のように日本の政治を観察しているだろうか、袖手してただ傍観しているのではないかと問いかけてくるような孫文からのメッセージである。

続けて孫文は、滔天に言った、

「人あるいはいわんとす、共和政体は支那の野蛮国に適せずと、けだし事情を知らざるの言のみ、そもそも共和なるものは、我国治世の神髓にして先哲の偉業なり、すなわち我が国の古を思う所以のものは、偏に三代の治を慕うに因る、しかして三代の治なるものは、実によく共和の神髓を捉え得たるものなり、謂うことなかれ我國民に理想の資なしと、謂うことなかれ我國民に進取の気なしと、すなわち古を慕う所以、まさにこれ大なる理想を有する証しにあらざるや、またこれまさに大いに進まんとする兆候にあらざるや、試みに政虜の悪徳に浴せざる僻地荒村に到り看よ、彼らは現に自ら治むるの民なり、その尊長を立てて訴えを聴かしむる所、その郷兵を置きて強盜を防ぐ所、その他一切共通の利害、皆人民自ら議してこれを処理する所、

これ簡短なる共和の民にあらずや、しかり、今もし豪傑の士の起こりて、清虜を倒して代わって善政を敷かんか、法を三章に訳するも随喜渴仰して謳歌すべし、すなわち愛国心もって奮興すべく、進取の気もって振起すべきなり（宮崎滔天、1998年、pp. 151-152）」、

この箇所においては、現代でも議論になっている点が挙げられているのは感慨深い。それは、中国が共和制、あるいは民主制に適するのかどうかということである。孫文はこの点について、中国が共和制に適応できることを主張している。孫文は、その根拠として中国の人々が古を慕うのは中国の理想国家とされた夏、殷、周の三代の治を慕っていることからであることや、また清朝の権力が及ばない僻地での自治を上げている。もちろん、この孫文の主張は儒教が中国社会にもたらしている権威主義の影響力を一部軽視していたもとれることは否めない。しかしながら、孫文は共和制に適応できる可能性を示していることもまた同様に否めないであろう。

孫文は続けて共和制への転換の必要性を滔天に言った。

「かつそれ共和の政たるや、ただ政治の極則たると、支那国民に適合するがための故に必要なのみならず、また革命を行うに便益あり、これを支那古来の歴史に徴するに、国内一度擾乱しの粉興するあるや、地方の豪傑、要所に割拠して互いに雄を争う、長さは数十年に亘りて統一せざるものあり、無辜の民、これがために禍を受くるもの幾許なるを知らず、今の世また機に乗じて自私を営む外強なきを保すべからず、この禍を避くるの道、ただ迅雷耳を蔽うにいどまあらざる的の革命を行うにあり、すなわち革命を行うと同時に、また英雄をして野心を充たさしむるに在り、しかしてそのいわゆる野心を充たしむるの方法、ただそれ共和の名の下に、連邦を作り、名声威望ある者をして一部に雄たらしむるにあるか、かくのごとくにして中央政府よくこれを駕御せんか、遂にはなはだしく紛擾を見ずして落着するに至らん、共和制の革命を行う上にも便益ありというはこれがためなり（宮崎滔天、1998年、pp. 152-153）」、

ここで、孫文が中国を共和制にする必要性について功利的に、しかし、中国の人民のことを真摯に考えていたことが伺える。孫文は中国のこれまでの歴史から、国が乱れると様々な群雄が現れ、国が統一されるまでに数十年かかることがあったことを振り返り、その犠牲となる民衆を思い、共和制の下でたとえ群雄が現われても国を一つの連邦にまとめることできる、したがって共和制への革命は利にかなっているのだと主張している。

最後に、この場で孫文が滔天に述べたことをこう記している。

孫文曰く、

「嗚呼今や我封土の大と、民衆の多とを挙げて俎上の肉となす、餓虎にとってこれを食えば、もってその蛮力をふるって世界に雄視するに至らん、道心あるものもれを用いば、もって人道を引っさげて宇内に号令するに足らん、余は世界の一平民として、ままた人道の擁護者としてもなおかつこれを傍観すべからず、いわんや身その邦土の内に生まれて、ただちにその痛痒を受くるにおいてをや、余や短才浅智、素より大事を担うに足らざるべしといえども、今は重任を他人に求めて袖手すべきの秋にあらず、故に自ら進んで革命の先駆となり、もって時勢の要求に応ぜんと欲す、天もし吾党に幸いして、豪傑の士の来たり援くるあらんか、余はまさに現時の地位を譲って犬馬の勞に服せん、無かればすなわち自ら奮って大事に任ぜんのみ、余は固く信ず、支那蒼生（人民）のため、亜洲黄種のため、また世界人道のために必ず、天の吾党を祐助するあらんことを、吾等の来たりて吾党に交を締せんとするは、すなわちこれなり、兆朕すでにここに發す、吾党發奮して諸君の好望に負かざるを努むべし、諸君もまた力を出だして吾党の志望を援けよ、支那四億万の蒼生を救い、亜東黄種の屈辱をすすぎ、宇内の人道を回復し擁護するの道、ただ我国の革命を成就するにあり、この一事にして成就せんか、爾よの問題は刃を迎えて解けんのみ（宮崎滔天、1998年、pp. 153-154）」

孫文による最後のこの箇所から最も印象に残った点は、二つある。一つは、孫文が「世界の一平民として」、「世界人道のために」というところから孫文が意識的にせよ無意識的にせよ自身が中国人であることを超えて世界市民としての自覚があることだ。孫文は中国の人々だけでなく、アジアの人々のため、世界人道ために革命を成就させると述べている。第二に、孫文が革命における自身の責任のあり方を明確に述べていることだ。この点については、孫文が現代までの政治家を眺めても非常に稀に見る責任感の強さと、真の誠実さを備えた人間であったことがわかる。孫文のこの精神からは、自らと他者との関係を考えることの大切さが学べる。自分が他者の人生にいかに関与を及ぼしうるかという自覚を持つということである。孫文は、指導者として自分自身が社会に影響を与えるかということをしきりと認識し、自らの所在を他者との関係から明らかにしている。

この一連の孫文の考えを聞いたのち、滔天はこう述べている。

彼のいうところ簡にしてよく尽くせり、しかして言々理義を貫き、また箇中自ずから熱情の燃えて溢るるがごときものあり、その弁舌巧妙なるにあらざれども、造らず飾らず、滔滔として天真発じよし来るところ、実にこれ自然の音楽なり、革命の呂律なり、覚えず人をして首肯せしむるの概あり、しかして談尽きればさながら小児のごとく、田舎娘のごとく、また一事の凝滞するものなきをみる、ここに至って余は恥じ入りて秘かに懺悔せり、吾思想を二十世紀にして心未だ東洋の旧套を脱せず、徒に外貌によりてみだりに人を速断するの病あり、これがために自ら誤り、ま

た人を誤ることははなはだ多し、孫逸仙の如きは実にすでに天真の境に近きものなり、彼何ぞその思想の高尚なる、彼何ぞその識見卓抜なる、彼何ぞその抱負の遠大なる、しかして彼何ぞその情念の切実なるや、我国人士中、彼の如きもの果たして幾人かある、誠にこれ東亜の珍宝なりと、余は実にこの時をもって彼を許せるなり、と滔天は述べている（宮崎滔天、1998年、p. 154）。

この孫文と滔天との問答は、滔天が書いたことなので、孫文が言っていないことも含まれているかもしれないが、孫文存命中に書かれた本であり、孫文と滔天の交友関係は生涯続いたことから孫文が認めた内容であったのだろう。滔天が孫文を支えた所以と孫文の革命への思いがよくわかる著作であり、多くの人々の心をつかむであろう著作であることがわかる。

『三十三年の夢』という滔天の著作は、滔天の息子龍介によると、元は秋山定輔が経営した「二六新報」に連載され、1902年に始めて出版され、売れ行きが良かったため十版を重ねたそうである（宮崎滔天、1972年、p. 272）。また、この著作は日本人に広く読まれただけでなく、漢訳もされ中国から日本に来た多くの留学生や華僑に読まれることとなった。この本は様々な人物に読まれたのだが、中でも「民本主義」という言葉に代表される吉野作造は「若し、私にその愛読書十種挙げよと問うものあらば、私は必ずその一として本書を数えることを忘れぬであろう。」と述べている。孫文の右腕になる黄興もこの本を読み、1905年に滔天に会いに行った。同年、中国の革命を目的に黄興と共に設立した華興会の宋教仁が滔天を訪問し、孫文と出会った（宮崎滔天、1972年、p. 330）。一冊の本が、孫文と革命の志士など様々な人とを繋いだのである。

したがって、孫文と宮崎滔天との関係は非常に強いものになった。また、宮崎滔天は孫文だけでなく、黄興や宋教仁など様々な中国人から親しまれるようになった。

孫文の革命の軌跡と日本との関係

孫文ら革命派は辛亥革命を果たす前に10回も革命に失敗した（保坂正康、p. 89）。革命運動と日本との関わりは中国国内における西欧列強や日本との対外関係の変化から大きな影響を受けた。辛亥革命以前では、義和団事件（1899年）、日露戦争（1904年－1905年）、第一次ロシア革命（日露戦争中の1905年）といった事件から、その影響の深さがわかる。

1899年に、義和団という中国国内の宗教団体が西欧列強の公使館を襲撃する事件、いわゆる義和団事件が起きた。この事件の背景には、第一次・第二次アヘン戦争による不平等条約に基づく西欧列強諸国の中国国民への圧迫と清朝政府への不満があった。日本は直ちに事態の收拾のため列強諸国とともに軍隊を送り、義和団を鎮圧した。鎮圧後、列強諸国と日本は北京議定書を結び、清朝から賠償金と中国での権益を獲得した。清朝にとって、一見各国との一連の条約は非常に不利のように思える。しかし、清朝にとって、既存の政

治体制の維持が目的であったために、条約によって各国から国家としての承認を得ることには意味があった。また、一連の賠償金は各国の銀行から借款し、各国との相互依存を深めることで、国内で反乱が起きても、各国から自分たちの政治体制を守ってもらえるようにしていたのだ。列国や日本にとっても、中国での権益が得られることは都合の良いことだったため、清朝を支え続けたのである。その一方で、清朝はその借款を返済するために、民衆に重い税をかけ、中国の民衆の生活は益々苦しくさせた。しかしながら、日増しに増す生活の苦しさは中国の民衆を立ち上がらせる契機になった。孫文に關係する革命派も義和団事件に合わせて、惠州で挙兵した（惠州事件）。この挙兵は、失敗し、共に戦った山田純三郎の兄山田良政が戦死した。孫文は非常に良政の戦死を悲しみ、仲間に良政の遺骨を探すように伝えたそうだ。

さらに革命派を勢いづけたのが日露戦争である。1905年に日露戦争で日本が勝利したことが全世界に伝わると、より多くの中国の若者が日本へ留学するようになった。安井三吉氏によると、日露戦争後、中国から日本への留学生は7千人に達した（王柯、p. 109）。そして、日本にいた留学生の多くが孫文ら革命派に呼応した。1906年の孫文ら革命派が東京の神田で行った講演会には、数千人の中国人が押し掛け、孫文らが同年東京で設立した中国同盟会にも863人が日本で入会登録した（同、p. 119）。日露戦争で日本が西欧列強の英雄であるロシア帝国に勝利したことが、中国の若い人に日本で学ぶ大きな魅力になったのであろう。また、日露戦争中に起きた第一次ロシア革命がさらに中国の革命に影響を与えた。したがって、日露戦争とロシア革命以降、中国の革命派が急速に力をつけることができたのである。

辛亥革命達成と日本政府の反応

1911年10月10日、孫文がアメリカのデンバーにいたとき、黄興らによって辛亥革命が勃発した。孫文が12月21日にフランス、イギリス経由で香港に到着し、上海に向かった。そのとき香港で孫文を迎えたのが宮崎滔天だった。共に上海に向かい、同年12月29日に孫文は中華民国臨時大総統に就任した。しかし、辛亥革命を果たしたとはいえ、南京を首都とする南方の中華民国臨時政府は、袁世凱の権勢下にある北方の清朝政府と対立し、妥協交渉が始まった。その結果、1912年2月12日に清帝溥儀が退位し、3月11日中華民国臨時約法を公布、4月1日には孫文は臨時大総統を辞職し、袁世凱に譲った。同年8月25日には中国同盟会は国民党となり、孫文が理事長、宋教仁がその代行になった。つまり、君主制の廃止と中華民国臨時約法を北方政府に認めさせる代わりに、孫文は臨時大総統を袁世凱に譲ったのである。一見、孫文らは自分たちの理想に近づけたように思えるが、この後宋教仁は袁世凱らに暗殺され、袁世凱は孫文ら国民党との約束を破り、独裁化をすすめることとなる。

一方、辛亥革命に対して、西欧列強諸国や日本はどう対応したのだろうか。西欧列強の対応に敏感に反応したのが、第二次西園寺内閣だった。その時の政府の態度がわかる一幕

があるので紹介したい。辛亥革命勃発後、寺内正毅朝鮮総督はすぐに元老で前首相の桂太郎に義和団の乱のように日本が干渉することに踏み切らなければならないと伝えた（宇野俊一、p. 227）。さらに、寺内は、第三次日英同盟、第二次日露協商による対外関係を活用して対処するよう訴えている（同、p. 228）。宇野俊一氏は、この寺内の進言は国際関係を重視していると評価している。

寺内は在清イギリス公使やタイムス特派員モリソンなどは、日本が推進してきたような清朝の立憲君主制への転換を支持しようとする政策とは異なる共和政体論であることを報告している（同、p. 228）。この寺内からの報告には、日本とイギリスがそれまで日英同盟で協調してきたことが、その関係が日本の対応次第では壊れかねないことを示唆している。寺内が続けて桂に対して忠告したことは、辛亥革命以前からの日本政府の孫文ら革命派が掲げる共和政体論について強い危機感を抱いていたことがわかる内容となっている。

寺内曰く、

「清国共和論ノ我人心ニ影響スル所ナル実ニ懼るべきものたる事は、今日我新聞界に青年の輩の処論に鑑み知るべき次第に御座候、当局宜しく此辺趨勢に対し相当覚悟下され候て然るべき乎と存申候（同、p. 229）」

清王朝が倒壊し共和制に転換することが日本の人心に影響することに当期の為政者が危惧をいただいていたと宇野俊一氏は主張している。日本では普選運動が1900年から始まっており、それ以前からも民権派との対立もあった。辛亥革命の前年には大逆事件として歴史に残る幸徳秋水らによる天皇暗殺計画もあった。日本政府が孫文らの共和制を認めることは日本における反体制派の運動に勢いを与えかねないことだった。

孫文が描いた政治体制が共和制であったことが、立憲君主制を護持していた日本政府が孫文を積極的に支援しようとしなかった大きな理由の一つだったのである。しかしながら、日英同盟との関係から、日本政府は辛亥革命に対して干渉することができなかった。滔天は、すかさずこの好機を利用して孫文と前首相桂太郎との会談を実現したのである。孫文は初めて日本政府から国賓として日本に来ることができた。しかし、前述したように、袁世凱が独裁化を進めるようになったことで袁世凱との対立が激化し、すぐに孫文は中華民國政府から敵視されるようになり、桂との会談で取り交わされたことも、1913年に桂太郎が亡くなったことにより、空文化した。日本政府にとっては、孫文らの共和制の失敗、袁世凱の独裁化は、国内の民主化の勢いを抑えることにつながるもので、都合の良いことだった。また、列強諸国も袁世凱政府を承認したことも不幸中の幸いであった。孫文らにとってこれは大きな逆境になったが、袁世凱打倒のために再び立ち上がった。1913年の第二革命は失敗に終わったが、それでも孫文らはあきらめなかった。

第二革命以後、孫文と日本との関係

第二革命以後、孫文は1914年に東京で中華革命党を結成した。同年、梅屋庄吉の紹介で宋慶齡とも日本の梅屋邸で結婚し、孫文と日本との関係は革命以前に戻ったかのように見えた。しかし、1914年にヨーロッパを舞台に第一次世界大戦（1914年－1918年）が起き、1915年に大隈重信内閣が対華二十一か条の要求を袁世凱政権に突き付けると、孫文はこの日本政府の対中強硬政策から日本が孫文の郷土である中国を西洋列強諸国と同様に、植民地の対象と考えているのではないかという疑念を抱くようになった。一方で、日本は第一次世界大戦の悲惨さを経験しなかったがために、大戦後の世界の変化を十分に理解することができなかつたように思える。むしろ、大戦景気に見舞われ、日本経済は急速に発展した。

しかし、大戦景気によって日本の都市と農村との経済格差は大きく広がり、人々の間に社会矛盾が増した。1918年には農村の米が不足し、米騒動が起きた。日本において貧しさに直面した多くの農民や、一方で人の命や生活を犠牲に自らの富を蓄えた人々は、中国における帝国主義による惨状を受け止めることができたのだろうか。他方、日本政府は、大正時代の民主主義の高まりに警戒を抱いていた。そのことは、1920年から1923年の治安維持法の形成過程から、いかに日本政府が政治体制の維持と資本主義を守ろうとしたかがわかる。

また、第一次世界大戦中に第二次ロシア革命（第一次世界大戦末期の1917年）が起きたが、この革命は孫文ら中国の人々に立ち上がる勇気を与え、孫文ら革命派は連ソ容共の立場を取るようになるきっかけとなり、ロシアとの関係が深まる契機になった。たしかに、それは、その後の日本政府の国体護持と経済のあり方に揺らぎを与えかねない外部要因と捉えられたと推測できる。しかし、もし日本政府がそれでも異なる政治思想に寛容になり、孫文らのアジアの連帯に真摯に応えようとしていたら、どう歴史は転じていただろうか。

歴史はそうはならなかった。中国では1919年に五四運動という反帝国主義運動が起きた。これは中国の民衆、特に学生による西欧列強諸国や日本の帝国主義的圧迫への反抗であった。その背景には対華二十一か条の要求や、1919年のヴェルサイユ条約への不満、第一次世界大戦を踏まえウッドロー・ウィルソンが1918年に提唱した十四か条の平和原則などが揚げられる。

しかしながら、中国において反日の気運が高まっても、孫文は1923年に関東大震災が起きたとき、後藤新平に見舞いの電報を打っている。また、第二次山本権平内閣の閣僚で旧知の仲だった犬養毅には支援要請をした。

1924年に孫文が最後に神戸に来たときは大アジア主義について講演し、講演に来た人に慎重に考えて日本が西欧の覇道の手先となるのではなく東洋の砦となるよう導くことを訴えた。その演説からは、日本が過ちに気づくことができると期待していたかがよくわかる。だが、孫文は翌年肝臓癌で亡くなった。

ここで、孫文が1924年に神戸に来たときに、孫文を訪ねた人や迎えた人を紹介したい。

大久保高明、菅野長知、菊池良一、島田経一、辻 鉄舟、寺尾 亨、頭山 満、宮崎震作、宮崎竜介、山田キヨ、山田純三郎といった旧知の人々や、憲政会の蟻川五郎作、神田正雄、望月小太郎、革新倶楽部では、通信政務次官の古島一雄、砂田重政といった政治家である。蟻川五郎作など護憲派の政治家は、政治体制が異なる孫文を本当に慕って訪ねたのではないであろう。また、中正倶楽部の井上雅二、斉藤藤四郎、西岡竹次郎、政友本党の高見之通、実業同志会からは森田金蔵、立憲政友会の山口政二といった政治家も訪ねてきた。貴族院議員では、研究会の池田長康、福原俊丸、前台湾総督の内田嘉吉、神戸市会議長、元逋信大臣の藤村俊朗、その他に政友会院外団常任幹事の森恪などがいた。軍人では、海軍少佐の鏑木武夫がいた。実業家では、三井物産船舶部の梅垣長二、第一銀行神戸支店支配人の大沢佳郎、日華実業協会の角田隆郎、日本貿易社長の神谷忠雄、日本石油専務取締役の津下紋太郎、今日と商業会議所会頭の浜岡光哲、東京商業会議所常議員が名を連ねた。その他分野では、川崎万歳、医学博士の岸 一太、台湾総督府囑託の新谷畔、京都大学教授の末広重雄、曾田定祐、寺嶋天園、遠矢平吉、永嶋忠重、南満州鉄道の林 正耕、和田長史などが孫文を訪ねた。

神戸市の地元からは、県知事の平塚広義、県警察部長の八木林作、県警外事課長の雪沢千代治、県産業部長の平田貫一、神戸地方裁判所長の成田惟忠、神戸市助役の永田亀作が訪ねた。

神戸の実業家と市議員では、神戸商業会議所会頭の滝川儀作、同副会頭で神戸市会副議長の西川荘三、神戸商業会議所書記長の福本義亮、日華実業協会会長で市議員でもあった草鹿甲子太郎、元神戸市長の鹿島房太郎、神戸岡崎銀行の岡崎籐吉、川崎造船社長の松方幸次郎などである。

その他に、神戸市から神戸日日新聞の相川小枝子、弁護士で元衆議院議員の今井嘉吉、神戸キリスト教青年会の奥村竜三、大本教神戸道院の北村隆光、神戸高女校長の篠原辰次郎などである。(安井三吉、陳徳仁編、p. 31)

孫文が孫文の描いたアジア主義をなぜ実現しなかったのかと思うほどに、多様な日本人が孫文を訪ね、迎えたことがわかる。中でも、山田純三郎（1876年－1959年）は、その後孫文が亡くなるまで行動を共にした。

第4節 孫文と日本との関係からの教訓

第3節から孫文と日本との関係について振り返ってきた。しかし、十分に振り返れたとは思えない。この関係は知れば知るほど深いことが分かった。その深さから孫文という人物の凄味を感じた。この第4節では、孫文と日本との関係を振り返って得られた教訓を整理する。

はじめに、孫文と宮崎滔天の『三十三年の夢』での対話から、民主主義とは何か、そして指導者とは何かを確認した。孫文が1906年に三民主義を掲げ、黄興らによって辛亥革命を成し遂げることができたのも、また一方で日本との連帯を確立できなかったのも、多様な人間関係にあったのではないか。1912年に中華民国の臨時大總統に就任したわけだが、そんな孫文を中国の同志や支援者だけでなく宮崎滔天をはじめとする様々な日本人が支え、海外で経済力のある華僑からの協力もあった。

その一方で、この間の孫文らに対する日本の対応は時局によって変化し、態度も拒絶や、敬意、無関心、共鳴、無知、あるいはそれらが入り混じったものと非常に多様だった。その背景には、日本が多様な国の方向性や価値観、境遇を抱えた集団で構成されていたからであろう。しかし、それゆえ孫文を支えた日本人がいても、強大な軍事力を有する政府の帝国主義的な態度を防ぐことができず、日本と中国アジアの連帯はならなかった。孫文と日本との関係から、いかに多様な人間関係を構築するかが重要なことがわかる。また、限界にも気づかなければならない。孫文と日本との関係から、人間関係構築に本質的に影響することは、自分が持っている考え方や行動であることを学べる。

人間関係という点では、孫文と宮崎滔天との関係からも、「友人関係」、あるいは本当に信頼し合える関係とは何かということもまた問いかけてくる。友人関係における重要な要素は何か考えたとき、互いに共感できることや対等であること、誠実であること、正直であることといったことが挙げられるだろうが、孫文と滔天の関係にはそれらの要素が備わっていた。したがって、孫文と滔天はそれぞれの国の情勢に影響されずに互いの信頼関係を維持できた。もちろん、ホッブスや荀子など哲学者や宗教家が唱えてきたように、人間は利己的であり、それゆえ友情を築くのはなかなか困難な時があるのかもしれない。

そこから国家も個人もただ野獣のように利己的であるとしたら、どうその困難を克服できるのだろうかという問いに直面する。しかし、孫文と日本との関係はいい意味でも悪い意味でも「共通善」の重要性を教えてくれる。孫文は、日本と中国どちらにとっても善いこととして「アジアの連帯」を訴え、その困難を克服しようとした。それだけでなく、「民衆」の置かれている悲惨な状況の打開についても触れ、中国と日本ともに共通して抱えていた問題に挑戦しなければならないことを訴えることで国を超えて多くの人々を巻き込んだのである。もちろん、ときに人々を共通善へと向かわせることで、人々を不自由にすることがあるかもしれない。しかし、それは人間にとって最も根本的に大切なことが何かを認識していれば回避できないことではない。日本も中国も日本だけの利益、中国だけの利益、あるいは日中のみの利益ということに囚われてはならないときがある。しかしながら、明治政府は孫文からのアジア連帯の呼びかけに対して真摯に応えられなかった。このことは、戦前の日本政府の過ちの一つであった。個人も政府も理念や、価値観、蓄積、年齢、地位、文化など様々な点で違いがあるけれども、共通の課題について対話することである。そこから政府と政府、国と国との間に真の友情が生じるのではないだろうか。

また、この歴史を通して、日本への留学生を増やすには、彼らが日本に来たいと思う理

由が必要なことがあらためてわかった。海外の多くの若者がアメリカに留学したいと思うのにはそれだけの魅力があるからだ。日本は大学機関の役割を十分に考えなかったがゆえに、あるいはその魅力を認め、導入しようとしなかったがゆえに大きな遅れをとった。政治や経済においても各国が日本と関わりたいと思うメカニズムを構築しなくてはならないだろう。

結びに

本研究を通して、自分はほとんど何も孫文と日本との関係性について知らなかったことがわかり、捉えきるには非常に難しいその深みを感じざるを得なかった。国家主義、国家同士の相互依存、イデオロギーの違い、経済格差、政治制度、権力闘争、科学技術の発展、時代情勢の変化など様々なことが、孫文と日本との関係にも絡み合っていた。孫文は自身の理念に沿って中国を変革するために国を超えて協力を求めた。日本政府にはたびたび中国との不平等条約の改正を要求した。中国の国家としての真の独立を回復したかったからである。『孫文・講演「大アジア主義」資料集』という本の中で安井三吉氏は、孫文の対日要求には第一に「自己」の革命運動推進のための直接的援助と、第二に中国の「国家」としての存立のための不平等条約改正という二種のものがあつたと分析している。孫文には清政府や軍閥に対抗する軍勢力が欠けていた。孫文ら革命派が既存の勢力と対抗するだけの軍勢力を備えるには莫大な資金が必要であつた。

孫文を通して日本と中国との関係を眺めると日中関係の光と影の両面が見ることができた。日本と中国との間に侵略する側とされる側の関係だけでなく、西欧列強に立ち向かうために協力し合う関係が築けたのではないかという疑問を持つほどに、日本人の中にも孫文を支持し、協力した歴史が存在した。その歴史を伝えることは、過去に日本が中国に対して何をしたかを伝えることには及ばないかもしれないが、今後、ますます日中が親睦を深めるためにも非常に大切なことであろう。同時に、孫文と日本との関係を通して、何故日中が協力し合う関係を築けなかったのかを明らかにすることが後世にとって重要なことである。その理由は、後世に生きる我々が悲慘な戦争を二度と繰り返さないための大きな教訓と知恵がそこにあるからである。本章を通して、改めてそれらの問いについての探求することから日中あるいは国を越えた友好の深化と拡大の可能性と意義を考える機会になった。

また、研究しながら意外にも、日本がいかに多様であつたかということを改めて考えさせられた。孫文と関わった日本人を知ればしるほどに、その対極である孫文と関わらなかつた日本人について考えた。本章の留意点としては、十分な資料に当たれなかつたことであるが、神戸の舞子にある孫文記念館や上野の国立美術館での梅屋庄吉展の訪問を通して、様々な歴史的事実に触れることができ、いくつか教訓を検証することができた。

孫文は今でこそ多くの日本人から幅広く親しまれている中国人の一人である。中国人で

あり、中国、台湾どちらからも尊敬される孫文が、日本の近代化を評価していたことが、敗戦後自信を失った日本人にとって日本の歴史に誇りを持たせてくれるからではないだろうか。誰でもいくら優れた功績や業績を果たした人物であっても、自らのアイデンティティを否定するような人を受け入れることも、ましてや尊敬することはむずかしい。そして、孫文も掲げたアジアの連帯は、再び東アジア共同体が叫ばれる現在からも、時代を超えて共感するものがある。

本研究を通して得られた歴史的教訓は、理論的にも説明されてきたことであり、現代社会の発展を感じさせるものだった。第一に「友人関係」という点では、西欧ではギリシアの哲学者ソクラテス（前470–前399）やプラトン（前427頃–前347）、アリストテレス（前384–前322）、イタリアの神学者であり哲学者であったトマス・アクイナス（1225–1274）、ドイツの哲学者カントなどが論じ、一方で東洋では仏教や儒学者によって論じられてきた。第二に「多様な人間関係の構築」は、「友人関係」より広い概念で、盛んに学会で議論されているが、最近ではFacebookやTwitterなどソーシャルネットワークサービス（SNS）の発展によって、情報がより共有しやすくなり、またグローバルに人間関係を構築しやすい環境になってきた。第三に、「時代や状況に対する認識を深めること」は、認識論として諸科学によって理論的に論じられてきたことと重なる。したがって、それらを歴史的にも確認できたこと、問い直すことができたのはよかった。最後に、孫文と日本との関係はその関係から学ぼうとするものがある限り、永遠である。

第2章 孫文の人物像とその思想

経営情報学部2年 吉田 敏子

はじめに

2011年は、孫文（そん・ぶん、1866年11月12日～1925年3月12日）が中心となった辛亥革命から100年。中国や台湾だけでなく、日本でも孫文や辛亥革命の研究会やシンポジウムなどが盛んに行われた。そんな中、インターゼミ（社会工学研究会）アジアダイナミズム班でも、孫文という人物や、孫文と日本の関係を調べ、それを通して今の中国と日本の関係を考え直すきっかけとした。孫文の人物像に対する様々な評価の中で、「無欲な人」だったという評価が特に印象に残った。しかしこのイメージは、事実なのだろうか。もしそうでなければ、孫文とは一体どのような人物なのか。孫文が持っている思想とはどういうものか。そして孫文がもし今生きていたら現代をどう考えたのだろうか。このような問題意識をもって孫文の人物像とその思想を考察する。

第1節 孫文という人物

孫文の生まれと名前の由来

孫文は1866年11月12日、中国広東省香山県（現中山県）翠亨村（参考図一）で生まれた。譜名は「徳名」、幼名は「帝象」、成長後の名は「文」、号（名や字以外に人を呼ぶ際に使われる称号）は「日新」である。号は、香港での勉学時代に「逸仙」と改めた。また、孫文という名前は、日本では広く使われているが、中国では「孫中山」という名前の方が広く使われている。

この「中山」という名前の由来は、孫文が日本亡命時代に住んでいた東京の日比谷公園の界隈に「中山」という邸宅があり、孫文はその門の表札の字が気に入り、自身を「孫中山」と名乗るようになってからである。また、日本滞在中は「中山 樵（なかやま きこり）」と名乗ることもあった。樵（きこり）には、黙々と中国の革命のために働くという思いが込められていた。このような経緯から孫文が、「孫中山」や「中山 樵（なかやま きこり）」を手紙などで使うようになったことから、中山という号が定着した。今では、中国で「中山」という名の施設がたくさん存在している。

孫文の家庭環境と学歴

孫文は、男3人、女3人の6人兄弟の5番目として生まれた。ただ、兄の一人と姉の一人は早くに亡くなっている。父の孫達成は、農民であったがそれだけでは食べて行けず、マカオに出稼ぎに行ったり、靴屋で働いたりもした。したがってこのような苦しい生活環境が、弱者を思う気持ちを芽生えさせ、革命家として目覚めさせていったと思われる。

孫文は、厳しい生活環境であったのにも関わらず、7歳の時から私塾に通った。家庭は食べていくだけで精一杯の状況ではあったが、両親は子供たちに最大限に教育の機会を与えた。また、孫文の12歳年長の兄である孫眉の援助も大きかった。

孫眉は、18歳でハワイに渡り、マウイ島でサトウキビ畑の労働者から身を起し、米作や酒造で成功した。この兄を頼って孫文は、1878年5月にハワイに渡った。ハワイでは、当初、兄の経営していた商店を手伝っていたが、その後キリスト教聖公会が運営していたホノルル市のプナホウ・スクールに入学した。この学校は、華僑を受け入れ始めて間もなかったこともあり、弁髪（べんぱつ）の学生がいじめられたりしていた。しかし弁髪の孫文は、自らの髪を切らなかった。このような行動からは、孫文の芯の強さだけでなく、愛国心も伺い知ることができる。プナホウ・スクールを卒業する時には、卒業生の中で2番目に優秀な成績を修めたため、ハワイ国王から表彰された。また、プナホウ・スクールでは、キリスト教の影響を大きく受けた。その後ハワイの最高学府であるオアフ大学に進んだが、そこでも孫文はキリスト教との縁を切らなかった。キリスト教にのめり込む孫文に危惧を感じた兄は、孫文を帰国させることにした。このような経緯により孫文の5年間に及ぶハワイでの生活は終えた。

当時の中国では、「宗教はアヘン」と呼ばれており、キリスト教にも否定的であった。そ

のため孫文の兄は、孫文のキリスト教への信仰に反対していた。帰国後に孫文は、まず広州の博濟医院付属の南華医学堂へ、その後香港大学医学部の前身である香港西医書院に入学した。この香港西医書院では、医学系の科目で優秀な成績を修めるのみならず、政治にも関心を持ち始めた。実際ここで出会った「四大寇」と呼ばれた政治に強い関心を持つ友人に出会っている。香港西医書院は、孫文が政治の基礎を学ぶ場ともなった。以上のように孫文は、ハワイや香港での生活を通じて、豊かな国際的な感性を育んだ。

孫文は、香港で医師の資格を取得したあと、マカオで病院や薬局を開業した。この薬局は、のちに孫文の革命運動に関わる人との拠点となった。ここから孫文の革命家として長い人生が始まる。

孫文の女性関係

孫文は、様々な業績を残した人物であった反面が、女性関係は複雑であったと言わざるを得ない。孫文と関わった4名の女性を挙げる。1人目は、同じ出身の蘆慕貞である。蘆慕貞は、同じ農村出身であり、孫文の両親によって決められた許婚であった。のちに孫文の第一夫人となった。

2人目は、大月薫という日本人である。革命運動をしている当時、日本という場所は孫文にとってとても都合のよい避難場所であった。しかし中国と日本を往来するパスポートがなかったため、何らかの滞在資格を欲していたことには間違いない。孫文は、1898年秋に横浜で仮住まいをしていたのだが、同じ家に仮住まいしていた一家の娘が当時11歳の大月薫であった。孫文は、一目ぼれした大月薫に結婚を申し込んだが、大月薫の両親は当然娘がまだ幼いことからその申し出を断った。しかし、3年後、孫文が再度、大月薫に結婚を申し出て、本人と両親の同意を得た。これにより孫文は、中国にいる蘆慕貞との夫婦関係を維持したまま日本人の大月薫と結婚することとなった。まさしく重婚となる。しかし結婚生活は、子供が一人生まれたものの、長くは続かなかった。子供は里子に出して、大月薫は再婚した。

3人目は、浅田ハルという日本人である。この女性とは、大月薫との結婚を待つ3年間に会った。この女性とは神戸で芝居を見たり、日本人経営の宿で泊ったりもしていたそうだ。

4人目は、孫文と共に歴史の一頁を飾る宋慶齡である。二人のことについての詳細は次の節で詳しく紹介する。宋慶齡と結婚する時は、中国にいる蘆慕貞とは正式に離婚した。

孫文は、犬養毅に「好きなものの一位は革命、二位はロマンだ」と語っていたというエピソードがある。孫文のこのような女性遍歴は決して理解できるものでないが、一方でそれほど魅力がある男性であったという見方もある。

第2節 孫文と宋家三姉妹

宋慶齡（そう・けいれい、1893年1月27日～1981年5月29日）は、上海の財閥の家

で 6 人兄弟の次女として生まれた。父は宋耀如で、兄弟に子文、子良、子安、蕩齡、そして美齡がいた。この 6 人兄弟の中で、特に三姉妹は孫文とは切っても切れない関係となり、のちに中国を大きく変える人物となる。

孫文と慶齡の出会い

孫文と宋慶齡との出会いを紹介する前に、まず父である宋耀如との出会いから解説する。

宋耀如は 1863 年、海南島の商人の家に生まれた。一族は、多くがアメリカに渡り、東海岸で中国商品を扱って商売をする華僑であった。宋耀如は、息子のいない叔父の下で 3 年間下積みをしたが、その後叔父の下を離れ、ボストン港から南部に向かって密航を企てた。その理由は、学問を身につけ自らの力で未来を切り開くためだった。密航には失敗したが、その船の船長に拾われ、そのまま船で働くこととなった。その間、キリスト教の教えを受けて、「チャーリ・スーン」という名ももらった。その後、宋耀如はマサチューセッツ州ランドルフにあるメソジスト・トゥリニティ・カレッジや、テネシー州ナッシュビルのバンダービルト大学で神学を学んだ。キリスト教会での活動も活発で演説を行うこともあった。宋耀如のアメリカでの生活は、14 年間に及んだ。具体的な記録は残っていないが、おそらくこの 14 年の間に、孫文と宋耀如は教会の活動を通じて出会ったのではないかと推測されている。そして帰国後、宋耀如は印刷会社を営みながら、孫文の革命活動の資金面のスポンサーとして支援した。この印刷会社では、聖書が山積みされていたが、ひそかに孫文の革命運動に関するパンフレットや宣伝文も印刷されていたという。

上海の財閥となった宋耀如は、子供たちをアメリカに留学させた。長男の子文と三男の子安はハーバード大学、次男の子良は自分と同じのバンダービルト大学に入学させた。また、長女の蕩齡をウエスレイアン大学に留学させ、その後姉の足跡を追うように、慶齡も、美齡も同じ大学へ入学した。2 人が渡米する 1970 年には、慶齡が 14 歳、美齡はわずか 10 歳であった。在学中の三姉妹の性格をまとめたものを紹介する。

蕩齡：芯が強い、真面目

慶齡：政治に関心があり、真面目、信念が強い

美齡：自分で物事を考える、気が強い、三姉妹の中で一番西洋文化に馴染んだ、国際的、外交的

長女の蕩齡は、大学を先に卒業して帰国後、父の勧めで孫文の秘書となった。しかし当時の中華民国財政部長の孔祥熙と結婚が決まったため、アメリカから帰国したばかりの次女の慶齡が姉の後を継ぐという形で孫文の秘書となった。慶齡は、孫文と面識はあったが、実質的に知り合ったのはこの時が初めてと言える。

孫文と慶齡の関係

慶齡は、孫文の秘書となり、これまで強い関心をもっていた政治の世界に踏み出した。また、秘書になってから 2 年後、二人は結婚することとなった。この時、孫文 44 歳、慶齡

は22歳であった。この結婚に対しては、さすがに父親である宋耀如は許さなかった。二人の結婚を知った宋耀如は、孫文宛てに以下のような内容の手紙を送った。

「あなたがおっしゃることは、あまりに唐突で信じることができません。冗談としか受けとることができません。全くばかげたことで娘の戯言としか思えません。孫先生、ふざけるのが好きな若い娘の戯言をどうか信じないでください。」

この文面からは、長年共にがんばってきた同士に娘を盗られる悔しさと同時に、その相手が自らが最も尊敬する孫文だからこそ、どう表現したら良いのか量りかねぬ苦悩がにじみ出ている。

しかし慶齡は、親の反対を無視し、ついに22歳年上の孫文と結婚することとなる。のちに慶齡は、孫文との結婚について以下の通り述べている。

「恋愛では、ありませんでした。遠くからの英雄崇拜でした。彼のために働いたのは、ロマンティックな娘の考え方でした。でもそれはよい考えでした。私は、中国を助けたかっただけです。孫博士は、それができるただ一人の人でした。」

「結婚式を挙げた後も、父と母は、それを破棄させようとしていました。父は、日本政府に働きかえようとさえしました。私は若すぎるし、無理やり結婚させられたのだと訴えたのです。むろん日本政府は、耳を貸そうとはしませんでした。母は、涙に暮れ、肝臓を患っていた父は結婚をやめるように嘆願しました。でも私は、泣きながらこれを拒んだのです。もうあれから50年もたつのに、私にはそれがほんの2~3カ月前の出来事のように思いません。」

このように慶齡は、家族の反対を無視し、孫文と結婚し、自分の一生を中国革命のために捧げた。またこの慶齡の結婚を機に、宋家一家、また宋家の三姉妹の間にも少しずつ政治情勢と共に亀裂が入って行った。

第3節 宋家三姉妹が選んだそれぞれの道

孫文は、慶齡と結婚して10年後の1925年3月12日に59年の生涯を閉じた。この時、妻である慶齡は、32歳であった。中国革命を導いた偉人の死、その後を継ぐ人が必然と出てくる。孫文の死を機に宋家三姉妹は、それぞれの道を歩み始めた。

長女の蕙齡は、孔祥熙という御曹司と結婚した。この結婚は、父の紹介によるもので、二人の結婚によって宋一族と孔一族の2つの財閥は揺るぎなく結びつき、さらに孔は中国革命の父である孫文の義兄という栄耀も手に入れることができた。

三女的美齡は、アメリカから帰国後、長女の紹介により孫文の死後、実際軍を握る右派の蒋介石と結婚した。蒋介石は、1887年10月31日に中国奉化県生まれた。幼い時に父を亡くし、母子家庭で育った。独特なリーダーシップにより、孫文の後継者として北伐を完遂し、南京（参考図一）で国民政府の樹立を宣言した。かつて孫文が将来の革命政府の旗として夢見ていた青天白日旗が、蒋介石によって掲げられる結果となった。しかし国共内戦により毛沢東の率いる共産党に負けたあと、台湾に逃亡した。国共内戦とは、中華民国政府率

いる国民革命軍と中国共産党率いる中国人民解放軍との間で行われた内戦である。

美齡は、蒋介石と結婚することによって、長女の蕩齡と同じ側に立つこととなった。

一方、孫文の妻である慶齡は、世界で唯一中国と友好関係があったソビエトを訪問し、夫である孫文の教えをモスクワという町を拠点に広げようとした。しかし結果的にソビエトからの支援協力を得ることはできなかった。その後、中国各地で孫文の思想を普及しようとしたが、当時すでに蒋介石の勢力と共産党の勢力が中国の大半地域を占めていたため、うまくはいかなかった。しかし新しい中国を作るという思いは、慶齡も共産党も同じであった。そしてついに迎えた 1949 年 10 月、中国は共産党によって建国された。その時、北京の天安門広場では約 30 万人の人民が集められたが、そこに慶齡も招かれた。しかし慶齡は、死ぬまで共産党員にはならなかった。その理由について当時総理だった周恩来は、以下のように述べている。

「共産党員は中国に何百万人いるが、宋慶齡はただ一人しかいない。孫文夫人は、一人しかいない」

慶齡は、孫文を癌で亡くなった後もずっと孫文の思想と共に生きた。

第4節 孫文の思想

孫文という人物は、中国と台湾の両方に尊敬される人物である。孫文という人物がいなかったら、果たして中国と台湾は存在し得ただろうか。孫文という人物は、いかに時代を先取りしたかを考えてみる。

大アジア主義

大アジア主義とは、1924 年 11 月に孫文が神戸で行った演説の内容である。演説は、新聞社五社の共催より神戸高等女学校で行われ、およそ 3000 人の聴衆が集められた。孫文の演説内容の一部を抜粋する。

「その一、われわれはここで大アジア主義をとえ、研究してきたが、結局どういう問題なのか。簡単にいうと、文化の問題であり、東洋文化と西洋文化の比較及び衝突の問題にほかならない。」

その二、ロシアは王道を唱え、霸道を主張しないヨーロッパの新しい国家、またロシアは公正な道をあくまでも主張し、少数が多数を圧迫することに賛成しない国家だ。

その三、われわれが大アジア主義をとえ、王道を基礎とするのは、不平等を打破するためだ。アメリカの学者は、あらゆる民衆解放を文化にそむくものとみなしている。したがってわれわれが現在、提唱している不平等を打破するための文化は、霸道にそむく文化であり、あらゆる民衆の平等と解放を求める文化なのだ。あなたがた日本民族は、欧米の霸道の文化を取り入れていると同時に、アジアの王道文化の本質も持っている。日本がこれからのち、世界の文化の前途に対して、一体西洋の文化の番犬となるのか、東洋の王道の干城となるのか、あなたがた日本国民がよく考え、慎重に選ぶことにかかっている。」

「一体西洋の文化の番犬となるのか、東洋の王道の干城となるのか」という発言は、日本国民の怒りを買うという恐れをなしてか、新聞社各社は掲載しなかった。

これは孫文にとって日本での最後の演説となったのだが、孫文は何を言いたかったのだろうか。

まず孫文は、ヨーロッパ文化を中心とした西洋文化と、中国文化を中心とした東洋文化を比較した。結論としては、ヨーロッパ文化は確かに発達し、アジアより優れている。しかし、ヨーロッパという地域はその発達した武力を使って人間を圧迫し、覇道を行ってきたのも事実だということ。このヨーロッパの覇道に対し、アジアには武力ではなく道理と徳によって他を感化する王道の文化だと主張する。また、いずれヨーロッパの文化は仁義と道徳の東洋の王道文化に服従するだろう、と孫文は当時そう予言もしたのだ。よって、孫文は自らの文化と他の文化を比較検討し、どの様な文化を目指すかを熟慮して決定する、そこに国家の歩むべき正しい道があるのではないかと主張した。また神戸で発表したこの大アジア主義思想は、これからの日本の対アジア政策に警鐘を鳴らしたものとも考えられる。

三民主義

三民主義は、孫文の主張の中でも中核をなしている。ただこの三民主義は、孫文が考えたものではない。

三民主義とは、具体的に言うと「民族主義、民権主義、民生主義」である。

孫文は、1921年の「五権憲法」で「三民主義とは、古今中外の学説を集め、世界の潮流に応じて政治的にまとめ上げた結晶体だ。」と述べている。この考えは、リンカーンの言った「Of the people by the people, for the people」という言葉と相通じていた。孫文は、このリンカーンの英文を「民有、民治、民享」と訳しており、これは「民族、民権、民生」と同じ意味であると認めている。それでは、民族、民権、民生とはどういう意味なのか。

民族主義とは、外国人がやってきて中国を治め、中国の皇帝になることを許さず、われわれ中国人が中国を治め、自分で自分を管理するという事。当時の中国の人口は、4億人いるにもかかわらず、中国は欧米列強に侵略されていた。その当時の中国を孫文は「砂」という言葉で形容していた。その原因としては、中国人は家族と宗教団体だけであって、民族の精神が欠けているためと指摘している。また中国は、そのまま進んで行ったら、いずれ外国にバラバラに分裂されてしまうという予想をした。そこで、今こそ中国は、民族全体に団結することが必要だと主張した。

民権主義とは、簡単に言うと民衆が一番大きな権力を持つこと。孫文は、「大衆の問題を処理するのが政治、これを行う機構が政権、人民がその仕事全体を把握していることが民権」と定義した。民権主義と定義したのは、この時期であるが、民権主義という考え方自体はその前からあった。ただ、それがただの考え方ではなく、それを実行することが重

要なのである。そこで孫文は機と能の分離ということを主張した。これは、人民の多くが有効に機能させる能力を持っているわけではないから、株主が経営者を選んで会社の業務を任せるように、能を権から分離して、奉仕者としての政治運営機構をつくらなければならない、ということなのだ。また孫文は、人民が持っている権力を主に4つに分けた。それが、「選挙権、罷免権、法律の創制権、複決権」である。よって、この民権主義は、中国を現代国家にするために大きく貢献したものとなった。

民生主義とは、人民の生活を保障するために、様々な政策を実施することである。孫文がこの三民主義を訴えたその時期は、ヨーロッパでは産業革命による労働者の低賃金や長時間の過酷労働といった社会問題が起こっていた。それをみて孫文は、この現象はいずれ中国でも発生するだろうと予想し、人民の生活、社会の生存、国民の生計、大衆の生命を守る立場から、こうした社会問題から国民を守るのが民生主義だと主張した。また、この民生主義はマルクス主義とも違うということを強調している。例えば、マルクス主義は競争により社会は前に進むということを主張した。孫文は、それは社会が進化するための一種の病気にすぎないと評価した。またマルクスは「剰余主義」は労働の搾取から生まれるとしているが、孫文は技術を開発した科学者や原料供給者から商品の買い手までが直接利益に関連するということを主張した。

このように、「三民主義」は中国に対し、民主主義のひとつの切り口となって、またアジアの中の国家のあるべき姿を作り出したものではないだろうか。

孫文が大事にしていたもの

孫文は、ハワイ、香港、マカオなどで学ぶとともに活動拠点にもした。そのため英語は中国語よりも上手だと言われており、ロシアやヨーロッパにも数多くの友人がいる。

そんな孫文が常に大事にしてきたものがある。それは、中国の古典と農民である。孫文は、中国で青春時代を過ごしていないけれど、中国の古典などの書籍を愛読していた。香港でも医学を勉強していた部屋に中国の古典の本がたくさん並んでいたそうだ。

また、孫文の改革意識は、官僚や知識階級上層部に依拠して活動を進めようとした曾國藩や李鴻章、中下層のインテリアを基盤とした康有為、または維新運動を起こした梁启超と違って、常に農民や平民のことを強く意識した。この背景には、やはり孫文の生い立ちや経歴が影響している。清末の大規模な農民反乱である「太平天国の乱（1850年に洪秀全を中心にキリスト教の信仰を紐帯とした組織太平天国によって起こされた。内乱終結時には史上最も犠牲者の多い内乱とされる）」は、孫文の出身地である広東省のとなりの広西省桂林県金田村の武装蜂起から始まった。この反乱は、孫文が生まれる2年前に収束したが、孫文は幼小時、村の反乱に参加した老人からよく反乱時の話を聞いていた。「太平天国の乱」の推定死者数は5千万人とも言われている。「太平天国の乱」では、スローガンが「戦死することは昇天することである」というものであったため、戦死した人も農民が一番多かった。14年間に及ぶの反乱を経て、結果的に当時の王朝清によって抑えられたが、やはり一

番の被害者は何の罪もない農民であった。農家出身の孫文にとってこの結果は、決して他人事とは思えなかった。これが、孫文にとって自分を忘れない、また弱者を守る原動力となった。

孫文は、常に自分の原点を忘れなかった。このような思想は、今日の社会においても大切なことだと思われる。まさに今の時代にも孫文の思想が生きていると言えよう。

中国の改革開放路線の先取り

当時発売された「建設」という雑誌がある。この中に「心理建設」「社会建設」と「建国方略」という3つの考え方が含まれている。孫文がこの中で述べていることは、60年後の現在においても中国の改革開放政策を先取りした内容となっている。

その一、中国交通の整備

孫文は、主要都市と港を結ぶ24の幹線のほか、東南、東北、西北、高原についての個々の路線の経路や全長を示した。臨時大統領を辞任した後に孫文は、全国鉄道総督弁として中国の鉄道開発計画に参加したが、そこには孫文ならではの綿密さが伺えた。孫文が考えた鉄道計画は、現在でも技術・環境的に実現できていない鉄道がある。すなわち孫文の考えは、すでに時代を越えていることがわかる。

その二、巨大ダムの建設

1994年に鄧小平が着手し建設した三峡ダムは、現在においては70万kWの発電機26台を設置し、1,820万kWの発電が可能で、世界最大の水力発電所となった。このダムの発案者も孫文であった。しかし計画は、遅れに遅れた。その理由は、1949年毛沢東が率いる共産党による建国や、その後の中ソ対立(1960年代)や文化大革命(1966-1976)、さらに建設反対論などがあったためだ。しかし文化大革命が終わる後、再びダム建設論が浮上し、第七期全人代第5回会議で、出席者2,633名中、賛成1,767名、反対177名、棄権664名、無投票25名で三峡ダムの建設は可決された。しかし中国でこれほどの棄権や反対が出るのは異例のことで、やはりダム周辺に住む住民の安全問題があったと思われる。そして結局、鄧小平が中国のトップとなった1994年に初めて着工することとなった。

孫文と鄧小平の両者を比較しても、やはり孫文の視野は常に百年、二百年先を見ていたことがわかる。

その三、外資導入

今となって、中国は第二の世界の工場とも呼ばれるようになったが、実は孫文は100年前にすでに中国を世界へと繋がるべきだと考えていた。そのために中国は、投資国の共同行動(コンソーシアムの形成)、中国側の信頼醸成、政府間の交渉と契約の実現という3段階を経て進めるべきと主張していた。

また、中国実業の開発には、個人企業と国家経営という2つの項目に分けることも主張した。しかしその中で重要なのはやはり二者がいかにいいバランスをとるかということも孫文は忘れてはいなかった。

第5節 孫文とはどんな人物なのか

このように孫文は、普通の家庭に生まれながらも、中国で革命を起こし、新しい中国の基礎を築いた。孫文は、やはり「無欲な人物」だったと思われる。そこには、これまでの生活環境が大きく影響していると言える。

孫文は、辛亥革命を起こした後、南京にて中華民国臨時政府を設立した。新体制の政府は、リーダーを投票によって選んだ。この臨時大統領の投票には、当時、国民党によって独立させた各省の長が17人集められた。ルールとしては、3分の2の得票を得た者が臨時大統領となるというものだった。投票の結果、孫文は16票を獲得して、中華民国の臨時大統領となった。この結果に全ての国民は納得した。しかし南京臨時政府が成立したからといって、清王朝が滅んだ訳ではない。そこで清王朝を倒すために、孫文は当時清王朝にも大きな影響力を持っている袁世凱と交渉した。その結果、清王朝を倒した袁世凱が1915年に中華民国の初代大統領に就任することとなった。これまで孫文を支持してきた人民たちにとっては、大変不満に思った。これに対し孫文は、「リーダーは誰なのかが重要ではなく、重要なのは新体制の成立だ」と答えたという。

孫文は、国際性が豊かな人物であった。ハワイや香港などへの留学で多くのことを学んだ。また、辛亥革命の時は、一番の革命パートナーである黄興に任せて、孫文は世界の国々との要人たちと連携を図った。このような国際的な経験とネットワークがあり、また国際情勢観と時代認識があったからこそ、辛亥革命に成功し、新しい中国を誕生させることができたと言える。辛亥革命当時、清王朝は国民党と戦うために、莫大な資金を必要としていた。そこで清王朝は、ヨーロッパ諸国に資金を借りる代わりに中国の鉄道を担保として提供しようとした。このような動きに対して孫文は、ヨーロッパ各国の銀行家や要人たちに清王朝に資金を貸さないように説得に回った。ヨーロッパ各国が中国政治よりも自国の経済的利益を優先させるという考え方を逆手に取り、「もし国民党が新中国を作れば、これから中国は世界の市場となる」といって説得した。この結果、ヨーロッパ各国の銀行家や要人たちは、孫文の考え方に賛同し、清王朝への融資を取りやめた。そしてこのことが辛亥革命を成功させる一つの要因ともなった。

孫文の豊かな国際性は、言語や海外での生活経験だけでなく、世界の人々の心をも掴む能力にも長けていたと思われる。

結び

中国で生まれ育った(15歳まで)私は、これまでずっと毛沢東が中国を作った人物と思っていたが、実は孫文と国民党が作ったということが初めて分かった。今の中国から見ると、国民党は小さい党であるが、歴史的に見れば、国民党こそが中国を作った党だといっても過言でない。また、日本との戦争がなかったならば共産党の勢力も強くならなかったのではなかろうかと思うようになった。このようにしてみると辛亥革命は、歴史的に必然

的なことだったと言える。今の世界の政治家やリーダーたちに欠けているのは、孫文がもち合わせた弱者への強い思い、国際的な広い視野、国単位で物事を考える力ではなからうか。

もし、孫文が今に生きていたら、世界をどのように思うのだろうか。また、中国についても、どのように思うのだろうか。

今、中国は、世界から独裁国家というように思われている。確かに共産党の一党独裁で統治されている。一党独裁は、国家決定の迅速性があるという見方もできるが、西洋国家からみれば人権が尊重されていないと言われても仕方がないかもしれない。孫文は、清を倒して中国に新しい民主制度を打ち立てた。しかし孫文が目指していたことは、現在のような一部の人民を無視して国家を運営することでなかったはずである。なぜなら孫文は、弱者の味方だからである。孫文が目指したかったのは、人々を幸せにすることだ。しかし今では、官僚だけが幸せな世界である。多数の国民は、依然として大きな勢力によって支配されている現状にある。もし孫文が今に生きていたら、台湾を中国の一部にすると同時に、台湾の国民党の長所を生かして、中国の野党にするのではなからうか。

孫文という人物は、中国を封建王朝体制から民主制に変えた歴史的な人物だ。孫文が残した業績は、歴史的な出来事となっており、共有すべき経験と教訓でもある。しかし現在の中国の官僚の腐敗や一党独裁などを見ていると、中国がどこに向かおうとしているのか分からない。孫文のように、国民のことを一番に考え、且つ決断力、実行力のあるリーダーが今中国に求められている。また、アジアや世界でも求められているように思われる。

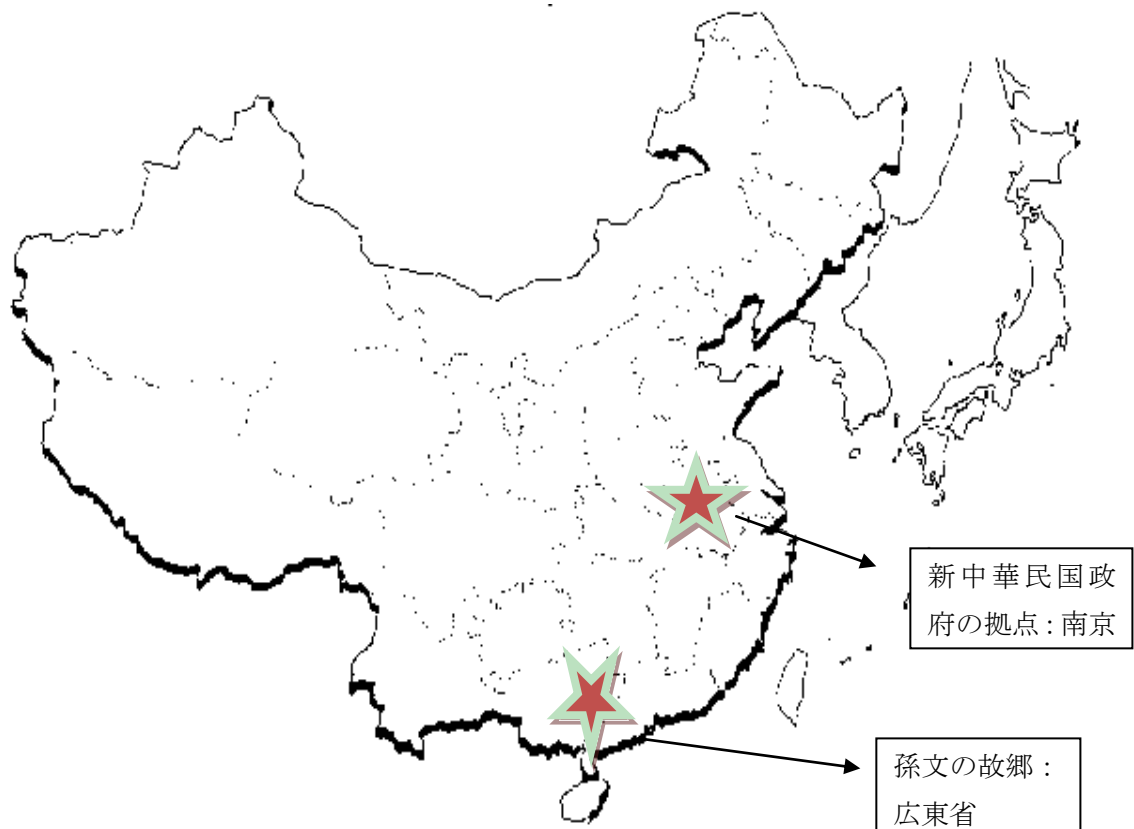


図 1

第3章 伊藤博文の対アジア戦略

経営情報学部 4年 西村 遼

「伊藤博文」この名を聞いてどんな印象を持たれるだろうか?私は、国、世代、個人の価値観によって印象が大きく変わってしまう歴史的人物の1人だと考える。

アジアの立憲体制の生みの親であり、立憲体制の下で、活躍した議会政治家であり、初代、5代、7代、10代内閣総理大臣及び枢密院議長、また「朝鮮統監府」初代統監である。日本人の多くが伊藤博文の印象を聞くと「初代総理大臣」と答えるであろう。日本の捉え方では、明治維新後の日本の開国者として日本に多大に貢献した人物として捉えられるが、朝鮮(韓国)の立場から見た伊藤博文の印象は、「侵略者」という印象が強く、敵と見なされ、伊藤博文には良いイメージを持っていない。

歴史的人物には、歴史的人物になった理由が必ずある。一方向から歴史を捉えるのでは

なく、多様な視点で捉えることにより、その人物が歴史的人物になった理由がいくつも出てくる。また、「光と影」の両側面も見えてくる。両側面が見えることにより、より一層歴史的人物に対しての問題意識、興味が湧いてくることもあれば、むしろ関心度が減ることもあるだろう。しかし、多様な視点や「光と影」の両側面からアプローチしてこそ、歴史の真実により近付けるとことと考える。

歴史的人物は、自らの力を最大限に発揮したことは間違いないが、周りの人的ネットワークに支援されたからこそ、偉業を成し遂げたとよく聞くことがある。どのような優秀な人物だとしても「国」という視点で物事を展開する場合は、一人が出来る事には所詮限界がある。しかし、歴史的人物は「自分と考えや志を同じくする同士を探し出し、さらにネットワーク化する能力に長けているように思われる。

この論文では、伊藤博文を中心とした歴史的人物が歴史的人物となるまで、どのように人的ネットワークを構築し、偉業を成し遂げたのか。私が今後社会に出る上で必要な歴史観と未来観の確立の一助としたい。

第1節 日清戦争

日本と清国のそれぞれの立場

日清戦争についてまとめる。日清戦争は、日本と当時の清国だけの戦争ではなかった。幕末以来、日本はロシアに対し非常に「恐怖感」を抱いていた。伊藤博文もロシアに対して恐怖感を抱いていたことは良く知られている。なぜロシアを恐れていたのか？ それは、一言でいえば「軍事力」である。

そのロシアが東アジア進出に躍起になっていた。ロシアはすでにシベリアを制圧、沿海州、満州をも制圧する勢いにあり、朝鮮にまで手が出てしまうのではないかという危機感が日本の軍部にあった。もし朝鮮がロシアの支配下に入れば、日本も支配下になってしまうのではないかという脅威が頭をよぎったと思われる。

日本は、開国維新後、朝鮮に対しても近代化を望んでいたが、朝鮮は清国の支配下にあった。日本は、朝鮮を清国からの独立を望んでいた。1875年に日本の軍艦が、朝鮮の首都漢城(現ソウル)に近い江華島砲台から砲撃を受け、報復として砲台を破壊するという「江華島事件」が発生した。江華島事件は、偶発か、計画的挑発か、日韓の主張や学説は大きく分かれるものの、結果的には1876年に「日朝修好条規」が締結され、朝鮮は開国を行うこととなった

「日朝修好条規」の第一条には、朝鮮がもう清国の支配下ではないことを記すことにより、清国に対して朝鮮が独立したことを大々的にアピールしている。朝鮮が独立国であることを承認したのは日本が最初であった。日本が朝鮮の独立を認めることにより、清国との勢力争いの幕開けとなった。一方、清国は朝鮮独立後、アメリカに近寄り、李鴻章をアメリカに派遣した。「米朝修好通商条約」を締結させ、「朝鮮は清の支配国」であることを条約の項目に入れている。

日清戦争の最大の理由は、「朝鮮の独立を認める日本」とそれに反対し、朝鮮を清の支配国と位置づけたい清国の争いが発端である。

ここで、日清戦争の開戦の詔書を日本と清国のそれぞれの立場から比較する。明治天皇の詔書には、「日本は朝鮮を独立国に導いたが、清国は朝鮮を属邦とし、終始その独立を妨害し、東洋の平和を乱している」と開戦の理由が述べられている。それに対し、清国の光緒帝の宣戦詔勅には、「朝鮮二百余年来我が属国であるが、日本が朝鮮を欺き、圧力を掛け、政治改革を強要することはことわりのないことだ」とし、「迅速に進奏し、厚く雄師を集め、陸続進発し、以って韓民を塗炭から救わなくてはならない」として、清国の支配国に侵入した匪賊国の討伐を命じるものだった。

日清戦争の詔書を通じて、日本と清国の考え方や価値観が全く異なることが伺える。ここで、注目したいのが、日本の詔書である。日本の詔書には、清国が朝鮮を支配国にしたいがために、東洋の平和を乱しているとまで断言している。この部分から日本が非常に清国に対して東洋情勢を乱している張本人だと主張していることも伺える。

第2節 日露戦争

開戦まで揺れ動く軍部

日清戦争以降、伊藤博文を中心に陸奥宗光（臨時）外相や山縣有朋大将らが協力して、日露協商を中心とした列強協調の外交路線を定着させた。

第4次伊藤内閣は、北清事変以降日本などの列強がすばやく清国から撤退し、混乱や分割をさけることを徹底したい考えだった。しかし、ロシアは、北清事変で東清鉄道に人的・物的損傷を受けていた。帝国主義時代においては、列強間でこのような事態が生じた場合、領土か利権・賠償金を受け取り、今後はそのような事態が起きない保証を得て撤兵するか、一定の駐兵権を保つと云うのが慣例であった。

伊藤博文としては、列強でのロシアの立場、すなわち駐兵させたいこともわからなくはなかったであろう。しかし、このまま清国を支配下に入れられては日本が列強国としての立場が危ぶまれる。伊藤博文にとって、日露戦争は一番回避させたい戦争であった。前述したようにロシアの軍事力を恐れていたからだ。誰よりもロシアに対して恐怖感を抱いていた伊藤博文にとって回避させたいのは当然のことである。しかし桂太郎首相に政権が変わるや伊藤博文に対し聞く耳を持たず、強硬姿勢に打って出ることになる。日露戦争開戦までの様子が伺える資料を紹介する。満州・韓国をめぐる日露協商が大詰めを迎えた1904年1月31日から日露戦争宣戦布告までの間、原敬は日記に開戦か避戦かをめぐる元老の揺れ動く模様を淡々と記している。原敬は、日清戦争期には陸奥宗光外相の下で外務省通商局長・外務次官を務め、1896年6月～1897年2月には特命全権公使としてソウルに駐在したことがある。その原敬が刻々と変化する日本情勢に対して危機感を抱いていた貴重な日記の一文を以下に記す。

『原 敬 日露戦争開始前 日記文面』

一月三十一日 井上馨伯に面会して時局の成行をただしたるに、政府の失錯も不手際もあれども、今日となりては之を云うも詮なし。万一、砲声一発、敗を取りては国家の運命に関する故に、財政上十分の援助をなして軍費に欠乏を感じさせぬを熱望する意味を物が語れり。私は、今回の戦争は実に非常の事なるにより、平和に帰せしむべき余地あらば平和に帰せしむべし。万一、余地なければ速やかに戦うにしかず。又、挙国一致の為には元老創出の論、至当なるが如しと述べたるに、井上は元老総出は、到底、和合一致を期しがたし、既往を論せず一致が必要なりと繰り返せり。・・・伊藤侯を訪う。和戦如何(いかん)を尋ねたるに、彼、之を予言せずと云えり。又、政府改造は挙国一致に必要なりと説きたるも、元老総出は行われずと云うに付き、総出と云うといえども、実は伊藤の内閣組織を望むものなりと云うに、伊藤、別に反駁もねけれども・・・

二月 五日 開戦となれば、国民は無論に一致すべきも、今日の状況にては国民の多数は心に平和を望むも之を口外する者なく、元老と雖(いえど)も、皆な然るが如くなれば、少数の論者を除くの外は、内心、戦争を好まずして而(しこう)して実際には戦争に日々近寄るものの如し。

二月十一日 (中略) 伊藤は最初より開戦論者にあらず。然れども明らかに非戦論を唱うるにあらず。井上は非戦を明らかに唱うるも、如何なる譲歩をなしても和すべしと云うにはあらず。而(しこう)して時局切迫に際しては既往を説くも益なし。砲声一発すれば敗となつてはならぬに付き、既往を捨て一意財政上に於いて政府を助ける事に決心したるなり。(以下続く)

日本としての立場、ロシアとしての立場

前文の通り、日本はロシアに対して恐怖感を抱いていた。1903年8月以降、日本政府はロシアに対して「満韓不可分論＝満韓交換論」の考えで日露協商に臨んできた。満州に軍隊を駐留させてロシアの満州における鉄道権益・商工業活動を認める代わりに、韓国における日本の優越的地位の確保と韓国領内の軍略的利用をロシアが承認するという交換論を提示した。

これに対してロシアは、日本の満州進出拒否、韓国独立と領土保全、領土沿岸の軍事的利用禁止などを主張し、北緯39度以北の中立地帯設定と韓国の軍事的不使用を日本に提案した。韓国の独立を認めたい日本にとってこの条件は飲めない内容であった。

1903年末日本政府は開戦を予期し、作戦計画、清国中立化工作に着手し、1904年1月12日の閣議は、協商案から韓国領内軍略上の使用禁止及び中立地帯設定条項削除は譲れないものの、満州はロシア、韓国は日本の利益範囲とすることを相互に承認するという最終案をロシア側に提示することとした。これは、日本とロシアにとって最適な譲歩案だと推測出来る。

現にロシアとの日露協商に臨んでいた伊藤博文は、桂首相に対し、「余の目的は相互的基礎の協商に比して、一層日本の為、利益となるべき情勢を作成せんとするにありて、万止

むを得ざる場合に至りて、即ち最下策として交互的基礎まで譲歩するのを覚悟なりき」という電報を送っていた。伊藤博文の外交戦略として、最終的には相手国の体面を傷つけずに「交互的」条件で妥結するのが外交の原則であると説いている。

伊藤博文の外交戦略を考えてみると、一方的に自らの利得を考えて相手国に迫ったとしても解決＝了承の余地はない。すなわち相手国に対しても利得をもたらす条件を提示しない限り解決の糸口はないということだ。

現代の日本と韓国においても「竹島問題」「従軍慰安婦問題」などを抱えている。お互いが国家繁栄の為にどのように行うのがベストな選択であるのかを相手国目線で考えることが大事だということを再認識することができた。

日露戦争開戦

桂首相、伊藤博文含めた元老たちは、ロシアが譲歩していることに気付かなかった。むしろ、ロシアが列強大国に本格的に名乗りを出したのではないかという危機感の方が大きかった。

1903年12月16日、元老と主要閣僚が首相官邸に集まり、会議を開くこととなった。桂首相、小村外相らは、まずロシアに再考を求め、もしそれが無理であるようなら、満韓交換論で最後の交渉を行うという意見でまとまった。

しかし、山縣有朋は満韓交換論で最後の交渉を試み、それが成功しないなら開戦であると強く主張した。この時、仲介に入ったのが伊藤博文である。12月20日に山縣に出した手紙で児玉源太郎参謀本部次長がロシアとの外交断絶前に、戦争準備のため多少時間が欲しいと要請しているので、ロシアに優柔不断の態度を見せ、陸海軍が協議をし、結束して行動する必要があるとの内容であった。

時の明治天皇も日露戦争には慎重だったということが言われている。その後の日露交渉も、桂・小村外相の下で進められた。日本は、ロシア側との交渉が3回に及んだ。1904年1月6日にロシア側からの回答は、前回同様に韓国北部に広い範囲で中立地帯を設定する内容が含まれていた。そこで、同年1月16日、日本は韓国全土を日本の勢力圏として再度要求する最後の提案を行った。しかし、ロシア側からの回答はなかった。

同年2月4日、伊藤博文ら元老と桂・小村ら主要5閣僚が集まって御前会議を行い、日露開戦を決定した。5日には戦時の動員が命じられ、8日に戦闘を開始、10日にロシアに対し宣戦布告を行った。



出典：桜井忠温著『銃後』（丁未出版社／大正4年）

第3節 日韓併合

日韓議定書発効

日露協商は、日本とロシアが韓国・満州をそれぞれの勢力範囲とする帝国主義国の分割交渉である。清国・韓国の意思を問うところではない。しかし、日本が韓国を自国の支配下に組み込むためには何らかの説明が必要であった。日本は、1898年「西・ローゼン協定」でロシアと共に「韓国の主権及び完全なる独立を確認」しており、1902年の日英同盟協約前文でも「韓帝国独立と領土保全とを維持すること」を明言していた。

1903年9月、小村外相は韓国駐在の林権助公使に、日韓攻守同盟の密約締結を指示した。日露協商の成り行き次第で日本軍の出兵を要する場合の根拠として、さらに日露開戦の場合、韓国を日本側にひきつけておく必要があった。韓国は自力で独立を維持できないから、同盟国の日本が韓国独立と安全保障を手伝うという言い訳にもなる。日本の対ロシア関係にとって、韓国の存在感・位置づけは非常に大事なものであったことが分かる。当初より、伊藤博文は日露戦争に対しては悲観的で軍部との意見が相違していたことは前述した通りである。しかし、日露戦争が開戦されるとなれば、今までのように対ロシアに恐怖感を抱いているわけにはいかない。どのようにすれば、日本に有利な方向に持っていけるか、また最小の軍備で戦争に勝つことができるか、相当な苦悩があったことは間違いない。日露戦争に勝つか負けるかによって韓国の位置づけが日本にとって大きく変わってしまう。東アジア情勢のキャスティングボードを握りたい日本にとってどんなことがあっても負けない戦争であった。

何としても日本の立場としては、「日韓議定書」に承諾してほしいと考えていたが、そん

なに韓国も融通が利く国でもない。韓国皇帝・政府に林権助は借款供与や閔妃暗殺にかかわり日本亡命中の韓国人の「処分」などを条件として韓国皇帝に迫り、1904年1月21日頃までに議定書案がまとまり、調印を待つばかりとなった。条文には、明確な同盟事項はない。「両国政府は常に誠実に相互の意思疎通をし、且つ扶掖にすること」としたうえで、「後来、本協定の趣意に違反す可き協定を第三国との間に訂立するを得ざること」とあるから、有事の際はお互いに協力することを合意した。

ところが、韓国皇帝が秘密裏に進めていた韓国戦時中立宣言が1月21日に発表された。既にヨーロッパ諸国は承認したということであった。日本にとって韓国側の行動は思いがけないことであった。駐日韓国臨時代理行使から小村外相にも中立宣言承認を要請する文書が届けられた。

戦時中立とは、他国間に戦争が起きた時、その中立国は戦争の局外に立ち、参戦はもとより、交戦国に対しては直接・間接の援助をしない法的地位を確保することである。日本とロシアが交戦しても韓国はどちらにも援助せず、軍用地も提供しない立場に立つと同時に中立承認国はそれを侵してはならないことになる。したがって日露開戦となれば韓国を用兵地域とする作戦計画をもつ日本は、韓国の中立宣言を承認できない。予定された日韓議定書とは相違したものであった。

日韓議定書その意義

日露戦争開始を目前にした日本にとって韓国の行動に動揺を隠せなかった。韓国側は、日本が日露戦争の開戦に当たり韓国を独立国にすると称し、実際には日本の支配下にされてしまうという疑念があった。そこで韓国側は、日本が中立宣言を承認したならば、議定書に調印・承認をするという戦略に打って出た。

このような閉塞的環境の最中、日露開戦が一変させることとなる。2月8日に上陸した先遣部隊2千余名のうち一部を仁川に残し、他はソウルに進入した。王宮・政府・外国外交団が集中するソウル地区を中立地帯とする計画を阻止し、首都を制圧した。

日韓議定書の交渉が再開されることになる。2月13日、先に凍結された議定書の調印書を携えて韓国の外相代理が日本の林公使を訪れ日本側に調印を求めた。韓国側は、日露戦争開戦後は議定書案が今よりもっと韓国にとって呑みにくいものになることを恐れ、調印をこの時点で行なうこと求めてきた。しかし、日本の林公使は新しく作成した条文を提示した。それは23日に調印される日韓議定書と字句の違いがあるが、基本的に同じ内容である。

新条文案が1月段階の日本案と異なる点は、一つに前案での日韓両国の相互「扶掖」にかえて、韓国政府は日本政府の助言を受け、内地外交の改良実施を義務づけたこと。二つ目は、韓国皇室の安寧・領土保全に危険ある時は、日本政府は臨機必要の処置をとり、韓国政府はそれに対して十分な便宜を提供すること。そして三つ目は、この条約に関する細

かい点については、日本公使と韓国外相間で協定することにしたことである。

日韓議定書は、そもそも戦争遂行にあたって、朝鮮半島の用兵地域化を合法化するために締結したと説明されることが多いが、もっと重要なことはこの議定書によって日韓関係が保護関係になったことである。保護関係とは、経済的・軍事的援助にとどまらない。韓国外交権の行使について日本の介入が始まることを意味する。

日韓議定書により、日本は韓国を「甲種真正保護国」とした。日韓両国は、相互承認を経ることなく、独自に外国と条約を締結できないとした。形式は双務的であるが、実際には日本政府が韓国の条約締結に際して事前承認権をもつことになった。議定書では、韓国の独立保障を明言していたにもかかわらず、独立国家としてもっとも重大な主権である条約締結権＝外交権をまず侵害したのである。

第4節 大アジア主義～広い視点でアジアを見る～

岡倉天心がこのようなことを述べている。「アジアは一つ」である。西洋とは異なるアジアの芸術、哲学、文化を明らかにし、その復活を訴えたもので、アジアの思想と文化の貯蔵庫である日本に、アジア文化を統一する使命があると説いていた。戦後になると、日本を盟主とする大アジア主義は、日本の驕(おご)りであり、このようなアジア解放の理念はアジア支配の野望を美化する隠れ蓑だったなどと批判の対象となっている。

それでは、一体どの国が盟主となってアジアの解放を行えばよかったのか。富国強兵の近代化路線を突き進む日本を除いては、アジアのほとんどの地域は西洋の植民地、あるいはその勢力圏下に転落し、自主自尊の精神を抱く民族が存在しなかった。東アジア・東南アジア諸国では、日本より先に近代国民国家や近代民族の形成を行った国はなかった。欧米列強のアジア進出によってもたらされた危機感から、日本が近代的ナショナリズムに目覚め、それを高揚しつつあった時期において、他のアジア諸民族は依然として眠っている状況であったのである。

日露戦争での日本の勝利は、黄色人種が白人人種に勝利したものと世界に受けとめられ、それまで世界に定着していた白人優位の観念を大きく覆す契機をもたらしたのも事実である。有色人種にもまた、大航海時代以降、軍事的に優位にある白人には永遠に太刀打ちできないものという考えもあった。ところが、日本が勝利したことで、その観念が覆され、有色人種は大きな自信と希望を抱くことになったのである。

一部のアジア諸国にとって、日本はアジアで最初に近代化を進めた国として尊敬の目で見られている部分もあり、また欧米列強から守ってくれたという意識もあることが伺える。

現にインドの初代首相ネルーは、次のように述べている。「小さな日本が大きなロシアに勝ったことは、インドに深い印象を刻み付けた。日本がもっとも強大なヨーロッパの一国に対して勝つことが出来たならば、どうしてインドにできないといえようか」「インド人はイギリス人に劣等感をもっていた。ヨーロッパは、アジアは遅れたところだから自分たち

の支配を受けるのだと言っていたが、日本の勝利はアジアの人々の心を救った」と述べている。

インドは1906年、大衆的な国民運動が始まり、ガンジーを中心とするインド国民会議派によって独立運動が広がった。ネルーも日本の戦勝の衝撃で独立運動に目覚めた一人であった。人の心を動かす原動力が日本の行動にはあった。

最も日本へ殺到したのは清国の留学生である。ピーク時にはその数1万5千人に達し、多くが強さに憧れ、新たな国づくり、即ち革命を志向した。1905年に興中会、華興会、光復会の革命3団体が中国革命同友会を結成した。中国革命同友会の総理となった孫文が、亡命先の日本で大アジア主義に心酔し、革命活動の思想的原動力にしていた。孫文を「国父」とする国民党や「近代革命の父」とする共産党はふれようとはしないが、孫文はめざすところの中国革命を第2の明治維新と位置づけ、革命を通じて近代的な民主主義、国家主義を高揚させた。

考察

今回の研究テーマは、歴史的人物から時代を検証することを主眼に置いてきた。伊藤博文に視点をあてれば、日本政府の大方が日露戦争開戦を望んでいたが、伊藤博文は断固として非戦を望み、その信念を曲げることはなかった。果たして現代に生きる日本人は、このような行動や信念をもつことができるだろうか。このような問題意識が、私の奥底から湧き出てきた。

現代の政治を見ていると責任は人に押し付け、信念を通して何かを進めようとする姿勢が伺えない。今の政治を司る政治家は、過去の歴史をどれほど振り返っているだろうか。

伊藤博文は、誰よりも世界的視野に立ち、国際情勢分析に基づいて戦略を練る人物であった。また、日本を自他ともに認められるアジアのリーダー国に発展させようとの強い信念を秘めていたようにも思われる。

今日本に必要なことは、さらなる問題意識の深化と物事を深く追求する探求力だと感じる。私は、伊藤博文の研究を通して、信念、誠実さ、探求力、世界的視野などを学んだ。

第4章

安重根の評価

経営情報学部2年 加藤駿介

はじめに

今回の多摩大学のインターゼミにおいて、伊藤博文を暗殺した安重根について研究を行った。安重根は、日本側から見れば殺人犯、テロリストであるが、韓国側から見れば英雄扱いされている。そこで安重根をいかに評価し、理解すればいいのかという問題意識を持つようになった。この疑問を解消すべく研究に取り組んだ。

第1節 安重根のアジアへの思い

安重根を尊敬する日本人の存在

伊藤博文（当時枢密院議長）は1909年10月26日、満州・朝鮮問題に関してロシア蔵相ウラジーミル・ココツェフと会談するためハルビン（哈爾濱）に赴いた。午前9時、哈爾濱駅に到着し、車内でココツェフの挨拶を受けた後、駅ホームでロシア兵の閲兵を受けていた伊藤に、群衆を装って近づいた安重根の放った銃弾3発が命中、伊藤は約30分後に死亡した。安重根は狙撃後、ロシア語で「コレヤ ウラー！（К о р е я！ У р а！）」（韓国万歳）と大きく叫んだという。

安重根（アン・ジュンゴン、1879年9月2日—1910年3月26日）は、日本では殺人犯やテロリストとして、韓国や北朝鮮では独立運動家や国民的英雄として知られている。

そこで安重根は、どのように評価し、理解すればいいのか。その糸口を安重根を尊敬するという日本人を通じて探してみる。

まず最初の人物は、安重根が留置されていた旅順監獄で安重根の看守としていた千葉十七である。千葉十七は、当初安重根を殺人犯として冷やかな目で見えていたが、次第に安重根の姿勢や母国に対する考え方に共感した。そして安重根が死刑に処される直前に安重根から遺墨を貰ったときに感涙したという。その後、千葉十七は、地元の宮城に帰国した後もこの遺墨に死ぬまで合掌し、安重根の冥福を祈っていた。さらには、大林寺に自らの墓と共に安重根の顕彰碑も建立させた。

次に紹介する人物は、伊藤博文の暗殺時に同じハルビンの駅にいて同じく負傷した当時満鉄理事であった田中清次郎である。この田中清次郎は、斉藤充功氏の「伊藤博文を撃った男・革命義士安重根の原像」という本の中にいかなのような一説がある。

田中清次郎の後輩から「日本人を含め、誰が一番偉いと思いますか」という質問に対して田中清次郎は「残念であるが、それは安重根である」と答えた。この田中清次郎は、伊藤博文と同郷の後輩で伊藤博文に大変可愛がられていたのにも関わらず、このような回答をしたというのであればその真意を深く考えざるを得ない。ましてや、自らも被害者であったにもかかわらずである。何をもって安重根を認めざるを得なかったのだろうか。一つ

分かったことは、「母国に対する愛情」ではなかろうか。

第2節 金玉均と安重根との関係性

歴史的に親日派として有名な金玉均と安重根との意外な関係についてまとめる。

今回は、安重根という人物に焦点をあてたが、調査研究を進めるうちに金玉均という人物が浮上し、気にかかるようになった。

金玉均（1851—1894、朝鮮王朝末期の政治家）は、朴珪寿（パク・キュス、1807—1877、朝鮮王朝末期の政治家）らの影響で開化思想を抱いた。その後、福沢諭吉と仲良くなり、日本で起きていた明治維新をモデルに清王朝からの独立と朝鮮の近代化を目指した。そして清仏戦争を機に 1884 年 12 月に日本公使・竹添進一郎の協力を得て閔妃政権打倒のクーデター（甲申事変）を起した。この事件は、開化派が閔氏一族を殺害し、新政権樹立宣言にまで至ったが、清の介入でわずか 3 日間で政権が終了した。金玉均は、その後日本へ亡命し、「岩田秋作」と名乗った。日本では、東京や札幌などを転々としていたが閔妃の刺客の洪鐘宇（ホン・ジョンウ）にピストルで暗殺された。暗殺された金玉均の体はバラバラに切断されて広範囲に渡り散骨された。

安重根と金玉均は、直接的な関係はないが、安重根の父親は金玉均と同じ開化派で一緒に行動を取っている。金玉均は、父と一緒に朝鮮を開化しようとした人物で日本でもその名を知られている。しかし金玉均は親日派であるのに対して、一方の安重根は反日派であった。仮に安重根が金玉均の思想に多大な影響をうけていたならば、果たして同じような行動をとったのだろうか。もし安重根が、反日派でなく、親日派であったならば、日韓交流のために重要な役割を果たすことができたのではなかろうか。

第3節 生い立ちから少年時代

安重根は、1879 年 9 月 2 日黄海道海州（ヘジュ）府首陽山（スヤンサン）の麓、広石洞で生まれる。現在の黄海道は、北朝鮮の南部に位置している。幼少時代には、応七と呼ばれていた。安重根の父である安泰勲（アン・テフン）は、6 人兄弟の三男で兄弟の仲で一番優秀であり、科擧の進士に及第した。早くから開化派の思想を受け入れ、朴泳孝（パク・ヨンヒョ、1861 年～1939 年）ら 70 余名の若きエリートらと共に日本へ派遣されることになっていた。しかしこの計画は、甲申事変（1884 年 10 月）の失敗により頓挫するどころか、開化派の主導者である朴泳孝や金玉均はお尋ね者となってしまった。安泰勲も一族と共に住んでいた海州から離れた。このとき安重根は、満 6 歳であった。

安重根が 16 歳になった 1894 年には、甲午農民戦争（農民の蜂起）が起きた。その中でも信川郡という場所での東学にかこつけ、元容日（ウォン・ヨンイル）らの一党が里を荒らしまわって民の財産を奪い、外国人を排斥するためと言って地元の官吏を捕らえて殺してしまった。その行為に怒った安泰勲は、同士を集め、そのような行為を行った人達を討伐する長（義旅長）となった。安重根は、16 歳に過ぎなかったが、「父が戦うのに、子が黙っ

てみていただけるでしょうか」と父を説得し、戦いに身を投じた。その後、安泰勲・安重根が率いる軍は、連勝を重ね「天降紅衣將軍」と呼ばれるようになった。

ある夜、仲間と共に斥候（敵の状況を偵察すること）に出た安重根は、蛮勇を奮って敵に奇襲をかけようとするが、逆に敵に包囲されてしまった。間一髪、味方の援軍に救われ、結局戦いに勝利する。これにより清溪洞を脅かす東学軍を討伐し、村には平和が戻った。

第4節 義挙への道のり

安重根は、いかにして母国を取り戻そうとしたか、なぜ義挙の道に進んだのか。

伊藤博文は1905年、韓国の王宮に乗り込み、高宗と閣僚に圧力をかけ、乙巳条約（第二次韓日協約、韓日保護条約）を韓国に押し付けた。この条約の結果、韓国は、日本から外交権を奪われ保護国化され、植民地化への転落の道を歩み始めた。日本の朝鮮支配を進めるため韓国統監府が設けられ、伊藤博文が初代統監に就任した。韓国政府は、日本の言いなりに成り下がった。

こうした中、安重根は、乙巳条約に関して父と議論した結果、母国を救うために中国に向かった。中国に行った理由は、当時多くの韓国人が上海や青島で活躍していたからである。しかし上海在住の韓国人有力者や韓国商人とも議論したが、意見が合わなかった。そんな中、天主教の聖堂でたまたま旧知のルーガク神父に会い、当面の救国の術を議論した。するとルーガク神父は、まず教育の発展、次に社会の革新、第三に民心の団結、第四に実力の養成が急務であると論じた。安重根は、これを受け、取り急ぎ帰国した。しかし帰国するや否や父の安泰勲が亡くなった。安重根は、父の臨終を看取ることができなかったが、きちんと葬儀を済ませ、その年の冬まで謹んで喪に服した。父の死を機に国権回復までは、日頃楽しんだ酒を断つことを誓ったという。

安重根は、その後日本に対して抵抗する運動などを繰り広げた。1907年ハーグ密使事件を機に1909年高宗が退位を強いられ、その直後には丁未条約（第三次韓日条約）で朝鮮王朝の政権も奪われた。ハーグ密使事件とは、朝鮮王朝（大韓帝国）がオランダのハーグで開催されていた第2回万国平和会議に密使を送り、自国の外交権回復を訴えようとするも国際社会の列強から会議への参加を拒絶され、目的を達成することができなかった事件。

さらに国の守りである韓国軍までも解散させられた。安重根は、南大門と西小門（ソソムン）の韓国侍隊本営を中心に、韓国軍の一部が蜂起し、3時間に渡って日本軍と激しい市街戦を繰り広げたが、最終的には多くの犠牲を出して無残に敗退した。この時安重根は、戦場に飛び込み救出作業を行い、その惨状を目に焼き付け改めて救国の誓いを新たにされた。そして釜山に下り、また再び北上して元山（ウォンサン）、会寧（ヘリョン）を巡ってロシア沿海州へ亡命した。

こうして国外に飛び出した29歳の安重根は、最初の3ヵ月間、旧満州延吉市龍井を中心に国権回復の根拠地を築こうとしたが、すでに日本の韓国統監間島派出所が設けられており、思うようにいかなかった。その年の10月中旬、ロシア沿海州に入りエンチア（現在の

のクラスキノ)を経て、ウラジオストックに向かった。

そこでは、まず独立運動推進のために、沿海州各地の韓人部落を訪れ歩きその教育と実業の発展を図り、抗日のために民心団結を目指して啓蒙活動を広げた。その後も各地の韓人部落を訪れ遠い所では、ハバロスク以北の黒龍江流域まで行って演説して回った。そして安重根は、国外の義兵に加わり、独立戦争に身を投じた。当時、エンチアは抗日の基地として有名であった。安重根らはここを根拠地に、国内進攻作戦を始め、本格的な独立戦争を挑んでいった。安重根のハルビン義挙の原点はここにある。エンチアを拠点とする国外義兵には柳麟錫(ユ・インソク)、洪範図(ホン・ボムド)のように、はじめ国内で戦っていたが、国外に出て北上するうちに、より長期的で効果的に戦えるようになる義兵も多かった。そうした中、安重根はいくつかの義兵部隊を組織し、豆満江(トウマンガン)をわたって洪儀洞(ホンウィドン)や慶興で日本軍と初交戦して勝利した後、3度にわたって連勝し、日本軍54名を殺し、14名を捕虜にしたが、釈放したという。しかし、会寧の南の霊山(ヨンサン)の会戦では、日本軍に敗退してしまった。

安重根は、この戦いで敗軍の将となると、禹徳淳(ウ・ドクスン)らと共に12日間に2度しか食事できず、九死に一生を得て帰還する。そしてエンチアにたどり着いた時には、友人でさえ見間違えるほどやせ細っていた。しかしそれでも、全く怯まず翌1909年1月、エンチアの下里で決死の同志、金起龍(キム・ギヨン)、朴鳳錫(パク・ボンソク)など12名と一堂に会し、薬指を切り落として血盟を交わし、「祖国独立の回復と、東洋平和の維持のため」に献身する「同義断指会」を結成して盟約した。彼らは、大極旗を広げ、各自左手の薬指の末関節を一举に断ち、ほとぼしる鮮血で「大韓独立」と記し、「大韓国万歳」を三唱した。また、安重根は、同義断指会の目的を明らかにする趣旨文を血書した。すなわち会長である安重根を中心に12人が共に一身を捧げ、祖国の独立を回復し、東洋平和を成し遂げるために結成した愛国結社であった。

第5節 義挙(正義の為に事を起すこと)

安重根が伊藤博文をハルビンで殺害する経緯についてまとめる。

1909年1月、同義断指会の会長となった安重根は、祖国の独立回復と東洋平和を成し遂げるために、「3(12)人同盟、報告血心、汎萬注一、断石透金、結義同盟、保国安民、患難相救、死生同居」という趣旨分を基にして会を率いた。

その年の10月に入り、伊藤博文がロシアの財務大臣であるココツェフーに会って東洋における侵略戦争を協議するために北満州を視察すると言う情報を得た。この情報は正しく、伊藤博文は10月14日、随員を従えて大磯を出発し、15日に下関で1泊して16日に門司を出港した。18日に大連に上陸し、20日には旅順に到着した。安重根にとってこれは絶好の機会とばかりに、国内進攻の盟友、禹徳淳と一緒に、10月20日、ウラジオストックからハルビンに向かった。その途中ポグラニチナヤで、ロシア語通訳の劉東夏(ユ・ドンハ)も合流させた。一行はハルビンに着くと、劉東夏の親戚の金聖伯(キム・ソンベク)の家に

一時身を寄せた。そして23日朝、写真館で義挙に前祝の記念写真を撮った。また同志の曹道先（チョ・ソドン）を訪ねて合流した。さらにその晩深夜まで計画の議論し、計画の内容と資金調達を求める手紙を書き、禹徳淳と連署のうえ、ウラジオストクの新聞「大東共報」の主筆、李剛（イ・ガン）に送った。24日朝になると、安重根と禹徳淳、そして曹道先は義挙の場所を求めて満鉄の列車で南に下り、蔡家溝で下車した。そして駅構内の旅館に宿を取った。あけて25日、安重根は万全を期すため、禹徳淳と曹道先が蔡家溝とハルビンのどちらでも事を起せるように準備しておこうと考えた。そこで、禹徳淳と蔡家溝を引き受け、安重根はハルビンに戻った。

その夜は、通訳の劉東夏と一緒に金起龍の家に泊まった。そして1909年10月26日、ついにその決行の日訪れた。午前7時頃、安重根は劉東夏が遅疑峻巡しだったので、途中でやむなく帰し、1人で駅構内の茶店に入り、伊藤博文の到着を待った。この時、蔡家溝の駅では禹徳淳と曹道先が怪しまれ、伊藤博文が乗る列車が通り過ぎる時には旅館の部屋に閉じ込められていた。彼らは翌日には逮捕されてしまう。

一方、26日朝9時ごろ、厳重な警戒網が敷かれたハルビン駅に、伊藤博文を乗せた特別列車が止まった。待ち受けていたロシアのココツェフー財務大臣が列車内に入って伊藤博文を迎えた。やがて20分ほどして、伊藤博文は随行員を引き連れ、財務大臣に案内されながら列車を降り、居並ぶロシアの儀仗隊を閲兵し、各国の視察団に挨拶し始めた。

この時、儀仗隊の背後から好機をうかがっていた安重根は、伊藤博文が10歩ほどのところに来た瞬間、すばやく拳銃を抜き放ち、間髪入れず伊藤博文めがけて引き金を引いた。

1発目と2発目は伊藤博文の胸に当たり、3発目はその腹を貫き、伊藤博文はその場に倒れた。それでも、安重根は万一人違いだった場合に備え、伊藤博文の後ろについてきた日本人に向かってもう3発打ち込んだ。これを受け、ハルビンの日本総領事・川上俊彦、宮内府秘書官・森泰二郎、満鉄理事・田中清次郎、満鉄総裁・中村是公が次々に倒れた。しかし日本側一行に混じって歩いていたココツェフー一向には一発も当たらなかった。

安重根は、伊藤博文が倒れたのを確かめると、「コリア ウラー」（韓国万歳の意）と三唱し、逃げも隠れもせず、堂々と落ち着き払ったまま、ロシアの憲兵少佐ミチョルコロフによって逮捕された。時に9時30分頃であった。

一方、伊藤博文は致命傷を負って列車内に担ぎ込まれ、応急処置を受けたが、20分後に息絶えた。逮捕された安重根は、駅構内のロシア憲兵隊分所でただちにロシア検察官に取り調べられた。安重根は尋問に対し、自分は大韓国人。安重根と言ひ、年齢31歳、「大韓義軍参謀中将兼特派独立中将」だと名乗り、独立戦争で敵の首魁（この場合は伊藤博文を指す）を討ち取ったのだと堂々と語った。そしてその夜の8時から9時頃、日本の領事館に移され、地下の監房に拘禁される。

第6節 公判と処刑

安重根が公判で受けた裁判記録から処刑にいたるまでの出来事や当時の彼の態度に関し

てまとめる。

義挙の当日、いち早く安重根の身柄を引き渡された日本側は、背後関係の把握と関係者の逮捕に血眼になった。まず安重根をハルビンの領事館の地下監房に拘禁し、韓国内外にわたる広範な調査を開始した。現地では禹徳淳・曹道先・劉東夏を初め、11名を関係者として逮捕、拘禁し、尋問を始めた。また国内でも、関係の容疑者として、安昌浩（アン・チャンホ）・李甲（イ・ガブ）らを拘束して取調べ、一方、安重根の二人の弟である定根、恭根はもちろん、母親までも尋問、調査した。このように内外の関係者への1週間にわたる基本調査と尋問を経て、日本政府は義挙の顛末の構図をつかんだ。そして、外務省の手で義挙の関係者の本格的な尋問調査と処罰へと進んでいった。

外務省が中心となり、朝鮮総督府を初めとする日本の内外の関係機関の協力のもとに、満州侵略の尖兵（敵の近くで行動する小部隊）となっていた旅順、大連の関東都督府管下の法院（裁判所）に安重根と関係者の身柄を送り、尋問、裁判が行われることになった。そして小村寿太郎外務大臣は外務所の倉知鉄吉政務局長を現地に急派し、この一件を指揮監督させた。一方韓国統監府では駐韓日本軍憲兵司令官の明石元二郎を派遣し、倉知鉄吉に協力させた。そして旅順の裁判所では、溝渕孝雄検察官をハルビンに派遣し、安重根らを尋問させ、厳戒態勢の下、安重根、そして関係者と見られる曹道先らに加え、金麗水（キム・ヨス）らの身柄を11月1日にハルビンから旅順に移し、3日には旅順監獄に閉じ込め、急いで公判の手続きを進めた。この時、統監府は、京城から朝鮮語に堪能な境喜明警視を派遣し、取調べを助けた。

その後1ヶ月に渡り、旅順でより厳しく尋問し、「極刑の懲悪」が決定される。これにより、12月2日に小村寿太郎が倉知鉄吉に「重刑懲罰」を電報に命じ、関東都督府高等法院長の白石氏は本国に召還し、「死刑判決のための公判を開く」ことを誓わされた。義挙から36日目、公判開廷2ヶ月前のことだった。

安重根の公判は、1910年2月7日から同月14日の間に旅順の関東都督府の地方法院で電撃的に進められた。真鍋十蔵裁判長の単独審理で、裁判団は溝渕孝雄と園木末喜通訳、および渡辺良一書記から成り、弁護人は日本人の官選として鎌田正治、水野岸太郎の二人だけが許可された。韓国内の有志は、安重根の母らが送った安ビョンチャン弁護士や沿海州の韓人が派遣したロシア人弁護士のミハイロフと上海から向かった英国人のダグラス、及びそのほかの外国人2人の弁護申請は当初の約束とは違い、いずれも不許可となり、日本人一色で進められた。

安重根はこのような公判の場でも、終始堂々たる理論と主張で義挙の理由と意義を述べ立てた。そしてハルビンでの義挙は決して自分のために行っただけではなく、韓国の独立と東洋平和のためのものだと明らかにした。

安重根は伊藤博文を射殺した理由を聞かれると、伊藤博文の罪状を15項目、一つ一つ列挙した。続いて、天皇が日露戦争を行うための大儀として宣布したように「東洋の平和の維持し、韓国の独立を強固にして、韓国・日本・中国の3国が同盟を結び、平和を叫び、

国民が互いに和合し、開花と進歩に力を注ぐならば、ヨーロッパなど他の世界の外国と共に、すべての国の国民が平和に生きることができるだろう」と主張した。しかし、伊藤博文が生きていては、韓国の独立が侵害され、東洋平和をなすことはできないと考え、この義挙を決行したと明らかにした。

そして2月14日に開かれた第6回公判では真鍋十蔵の判決で幕を閉じた。その判決は、日本政府の既定方針の命令どおり、安重根に対して「死刑」が宣告された。禹徳淳には懲役3年、曹道先と劉東夏は懲役1年6ヶ月が宣告された。しかし、安重根は死刑判決を受けても「日本には死刑以上の刑罰は無いのか」と煩悶し、血相一つ変えず、毅然たる姿勢を貫いた。

安重根は、このように公判を境に、意気消沈に旅順監獄の中で、自らの潔い人生を記した自叙伝『安重根歴史』を綴った。これは、公判開始2ヶ月前の1909年12月13日に執筆を初め、死刑宣告の11日後、3月15日に脱稿した。また、その完成の直後から『東洋平和論』執筆に着手し、3月13日には序論を終え、各論にとりかかった。

しかしこの貴重な叙述は、日本が約束を間違えたため、「序」と本文中の「前鑑」だけが書かれ、残りの「現状」「伏線」「問答」は目次で終わり、執筆の途中で刑が執行され、未完として残っている。しかし『東洋平和論』はハルビン義挙の崇高な意思を明らかにする安重根の愛国的な政治思想の結晶だといえる。

この「序」の末尾に、「東洋平和のために義戦をハルビンで起し、談判の場を旅順港に定め、続いて東洋平和の問題に関する意見を提出するところだから、皆さんはその目で診察されたし。1910年2月、大韓国人安重根、旅順獄中にて書く」としたため、固い意志を明らかにした。

東洋平和論の執筆は未完に終わったが、安重根は、その政策の要旨は1910年2月17日平石氏人高等法院長との面談の席で語っており、その記録は『聴取書』として残されている。これには、現在のEUや国連軍に通じる、時代を数十年も先取りした内容が記されていた。

安重根は1910年3月26日、日本の関東都督府旅順監獄で死刑が執行された、潔い殉国となった。これに先んじて安重根は、旅順地方法院での死刑判決後も、あえて控訴しなかった。これは母の教えてと、安重根自身の決然たる意志によるものだった。ただその間、彼が『安重根歴史』に続き、執筆中だった『東洋平和論』を完成するために、平石氏人に完成まで執行をいくばくか延期してくれるよう希望し、承諾まで得た。しかし、彼らはこの約束を間違え、安重根が初め願っていた執行日の10月25日が純宗皇帝の誕生日だということで、1日遅れの26日午前10時、典獄（刑務所の長）の栗原貞吉と溝渕孝雄、そして園木末喜らの立会いの下、監獄内の死刑台の絞首台で刑に処せられた。

安重根はその前に故郷から送ってきた白の明紬（ミョンジュ：死刑用の服）の韓服に着替え、静かに膝を折って祈った。典獄が執行文を朗読し、言い残すことはないかと聞くと、ほかでもなく「東洋平和のために決行したことだから、今日臨検している日本の官憲（警

官) たちも、今後、韓日和合して力を注ぎ、東洋平和に力を尽くして欲しい」と述べ、「私と一緒に東洋平和万歳を叫ぼう」と呼びかけたが、彼らはそれをさえぎり、刑を敢行したという。それから12分後の午前10時15分ごろ、検察医が脈を確認し、真新しい棺に亡骸を納めた。

この亡骸は、弟の安定根、安恭根の2人の願いと絶叫にもかかわらず、遺族には引き渡されず、関係者だけが立ち会って監獄の囚人墓地に埋葬された。日本側は、安重根の亡骸が韓国人の手に渡れば、その墓が韓国独立運動の聖地となることを恐れたのだ。その後、安重根の遺骨は光復（復興）から60年以上過ぎた現在に至っても、その所在は知れず、安重根は死を前に「私が死んだら、骨をハルビン公園のそばに葬り、わが国権が回復したら、故国へ搬送してほしい。私は天国に行っても、当然また国権回復のために力を注ぐであろう」と述べたが、その願いはまだかなえられていない。

第7節 遺墨

安重根が自分の看守であった千葉十七に送った遺墨の内容についてまとめる。安重根は、旅順刑務所に収監された後、死刑宣告を言い渡された1910年2月14日から、殉国(処刑)した同年3月26日のおよそ6週間、200点前後の揮毫（書画を書くこと）をし、収監中に親切にしてくれ、気心の通じた関東都督府訪印および旅順刑務所の看守や関係当局の日本人、知人にそれらを贈ったことが知られている。安重根の遺墨は、幼いときから学んだ漢字の素養をもとに、先賢から学んだ文章や詩句を独創的に解釈したものである。具体的には『中庸』『論語』あるいは韓国の『明心宝鑑』、李白や杜甫の五言または七言絶句、韓国の松江（ソンガン）チョン・ Chol（朝鮮王朝時代の文人）などから引用、参考としたものが多い。そして落款の代わりに1909年2月、12名の同志とともに指を断ったときの、薬指のない左掌印（手形）が捺されている。

看守の千葉十七もまた、安重根の揮毫を贈ってもらいたがった1人であったが、当初それを切り出せず焦っていたことが知られている。このときの様子を小説家、韓碩青は『安重根』の中でこのように活写している。

千葉十七が静かに近寄ってきた。彼は安重根から揮毫を書いてもらえず焦っていた。3月25日、まさにその翌朝、刑が執行されるのに、安重根はなかなか筆を執ろうとしなかった。

「安重根先生、最後の写真を撮るよという命令が出ました。」

安重根は、歴史の里程碑を揺るがした遊撃隊の安重根は、永遠に存在するという意味で、写真を残すこともそれなりに意味があると思った。千葉十七はこの5ヶ月間、安重根の看守として努めながら情が通い、彼なりに憂鬱な気持ちになっていた。彼だけではなく旅順監獄の看守の誰もが安重根の人柄と気概に感服していた。

安重根は面会室に連れて行かれ、其処で写真を撮った。憔悴した姿を残すまいと努めて毅然とした姿勢をとった。翌日、ついに最後の瞬間が訪れた。安重根はその日の朝早く、その間、気が通じるようになった千葉十七に最後の揮毫を振るった。

『為国献身軍人本分』（国のために身を献ずるは、軍人の本分）

庚戌三月 於旅順監獄中

大韓国人 安重根

それは、大韓義軍参謀中将であり、抗日部隊の戦死であった自分の勇士を表す記号だった。千葉十七は喜びを隠しえず、死を目前に控えた安重根を見上げながら心身が揺れ動いた。

安重根は筆を擱くと、いつものように薬指を切った左手に墨をつけて力強く押し付けた。

「千葉十七上等兵、この間、親切に接してくれて深く感謝しています。東洋に平和が訪れて韓日間の友好が蘇れば、私は再びこの世に生まれ、会えるだろうと思います。天を仰ぎ、恥じることの無い生き方をしてください」

「ありがとうございます。安重根先生」

安重根はその間書いた自叙伝の原稿と紙と筆と硯、そしてまだ書き終えていない『東洋平和論』の草稿を千葉十七に託し、処刑場に向かった。

結び

一番初めの安重根のイメージは、日本の初代首相の伊藤博文を暗殺した人間としか分らなかった。それだけ彼は日本から嫌われていた存在であったことも確かだが、今回調べていて日本人でも彼のことを尊敬する人達がいたということを知った。その中に千葉十七のように自分の墓に安重根から貰った物を一緒に埋葬するような人もいたことに驚いた。また、安重根は日本から母国である朝鮮を救うため自分の命を捧げたのであるが、これは同時に朝鮮王朝に対しての怒りであったようにも感じた。当時の朝鮮政府は、日本にまったく抵抗できず、条約など締結の際には議論はほとんど行われず、執行していたので、安重根らは不満に思っていたことには間違いない。そういう意味では、彼が朝鮮で英雄として有名なのが理解できる。

今後の課題としては、今回は安重根一人に焦点を置いていたが、その周りには彼に様々な影響を与えた人も多くおり、その中には暗殺された金玉均という日韓に関係した人物もいた。今後は、朝鮮や朝鮮人と親交が深かった福沢諭吉も研究したい。また、金玉均の目線から様々な日本人を調査していけばもっと日韓のより深い関係を再発見できると思う。

もし安重根が今の日本と韓国を見たらどうおもうだろうか。嬉しい反面、悲しがるかもしれない。その理由は、産業面や文化面では交流が活発であるが、一方で竹島（韓国では独島）の領土問題や従軍慰安婦など歴史認識問題があるからだ。そういう意味では、日本と韓国の関係は、まだまだだと悲しむであろう。

今回、安重根を学んで今後に生かしたいことは、イメージや一つの方向性だけではなく、様々な視点から歴史、人物、物事を判断する必要があるということである。

最後に安重根は、母国に対する愛国心をどうして持つことが出来たのだろうか。この場

合の愛国心は、排除という意味ではなく、母国を護るという意味だと思われる。これを機に私自身と日本との関係を改めて考えてみたい。



図録・評伝 安重根 著者：姜昌萬から引用

2 為国献身軍人本文

国のために身を献ずるは、軍人の本分



図録・評伝 安重根 著者：姜昌萬から引用

結び

歴史を学ぶということは情報収集との戦いだった。しかし、その情報を整理することや、汲み取ることはより困難であった。何を焦点にするかによって、歴史の結びつけが変わってくるが、一つ一つの歴史が全く関係ないことはないということがわかってきた。この研究では、歴史的人物を通して過去の日中韓の関係を振り返り、現在・将来の日本と中国、朝鮮半島との関係をより深く理解することを心掛けた。

また、少なからず日本と中国、朝鮮半島との間に起きた悲惨な歴史について知っている人が孫文について知れば、孫文の大アジア主義の理念が実現していたなら、日本と中国、あるいは朝鮮半島との間に、あるいは世界と日本との間にあのような歴史が刻まれることも、そして尊い命を戦争で失うこともなかったという思いがめぐるのであろう。たしかに、日本人の中には、これまで孫文を単なる理想主義者、強大な力に無謀に立ち向かった人物だと評価する人もいた。あるいは孫文のことを知らなかった日本人もいたであろう。現代においても孫文のことをよく知らない人はいる。ましてや、戦前において知っている人はどれだけいたであろうか。そのことは、安重根や伊藤博文においても言えることである。

しかし、それでも何故アジアの連帯が実現しなかったのか、あるいは安重根を伊藤博文暗殺へ駆り立てた動機を理解することによって、現代に生きる我々も他者との関わりを振り返ることができる。

本研究は、孫文や安重根、伊藤博文といった歴史的人物から何が学べるかといった素朴な疑問に向き合って、研究してきた。

平成 24 年 1 月 14 日
アジアダイナミズム班一同

参考文献一覧

< 共通書籍 >

- 寺島実郎（2010年）『世界を知る力』PHP新書
寺島実郎（2011年）『世界を知る力 - 日本創生編-』PHP新書
寺島実郎（2007年）『二十世紀から何を学ぶか（上）』新潮社
金 美德（2011年）『なぜ韓国企業は世界で勝てるのか』PHP新書

< 第一章 >

- エドウィン・O・ライシャワー（2009年）『ライシャワーの日本史』国弘正雄訳 講談社学術文庫
王柯編、櫻井良樹、趙軍、安井三吉、姜克實、汪婉、呂一民、徐立望、松本ますみ、沈国威、濱下武志（2011年）『辛亥革命と日本』藤原書店
ジョセフ・S・ナイ・ジュニア/デイヴィッド・A・ウェルチ（2011）『国際紛争—理論と歴史』田中明彦、村田晃嗣訳 有斐閣
陳徳仁、安井三吉編 『孫文講演「大アジア主義」資料集』1989年 法律文化社
保坂正康（2009年）『孫文の辛亥革命を助けた日本人』ちくま文庫
宮崎滔天（1998年）『三十三年の夢』日本図書センター
宮崎滔天（1972年）『三十三年の夢』平凡社
Pakaluk, M. (1991). *Other selves. Philosophers on friendship*. Hackett Publishing Company. U.S.

< 第二章 >

- 吉田光男（2004年）「日韓中の交流」山川出版社
田所竹彦（2000年）「百年先を見た男」新人物文庫
伊藤純、伊藤真（2000年）『宋姉妹—中国を支配した華麗なる一族—』角川文庫
保坂正康（2009年）『孫文の辛亥革命を助けた日本人』ちくま文庫
保坂正康（1998年）『蒋介石』文春新書
北村稔（2011年）『現代中国を形成した二大政党』ウエッジ選書

< 第三章 >

- 伊藤之雄（2009年）『近代日本を作った男』講談社
海野福寿（2004年）『伊藤博文と韓国併合』青木書店
小川原宏幸（2010年）『伊藤博文の韓国併合構想と朝鮮社会』岩波書店
斉藤充功（1999年）『伊藤博文を撃った男』中央公論社

佐々木隆（2008年）『韓国現代史』中央公論新社
代々木隆（1999年）『伊藤博文の情報戦略』中央公論新社
佐木隆三（1996年）『伊藤博文と安重根』文藝春秋

<第四章>

姜昌萬（2011年）『図録・評伝 安重根』日本評論社
斉藤充功（1999年）『伊藤博文を撃った男 革命義士安重根の原像』中央公論社
趙景達・宮崎博史・李成市・和田春樹（2010年）『「韓国併合」一〇〇年を問う』岩波書店
前田憲二、和田春樹、高秀美（2010年）『韓国併合一〇〇年の現在』東方出版
水間政憲（2010年）『「日韓併合」の真実』徳間書店
吉田光男（2004年）『日韓中の交流』山川出版社